



～トキルソカ～
永遠の恋詩

藤波 紫

人間 (ヒト) は、その人の事を悪魔 (サタン) という
一瞬の子 明けの明星 (ルシフェル) よ
何故貴方は天から墮ちたのか
さて天に戦いが起こり 大天使ミカエルと彼の使いたちは竜と戦った
竜とその使いたちは応戦したが勝つことは能 (あたわ) ず
天には最早彼らのいる場所がなくなった
かくてこの大いなる竜 すなわち反逆者、サタンと呼ばれ世を惑わす
かの古き蛇は投げ落とされた
彼は地に落とされ その使いたちも共に落とされた

(ヨハネ黙示録第 12 章)



「今日は霧が深いから、お気をつけて。神のご加護がありますように。」

「ありがとうございます。では、また明日。」

ルドルフ・パウル神父は、美しい娘、ナディアを見送ると教会の中に戻った。その顔は、何か考え込むような難しい表情をしている。

「リュシフェ様が領主になられてから17年が経った…。」

その時、風が教会の窓をゆらした。ふと窓を見ると、外は霧で薄暗くなっている。

「今日は本当に霧が深い…。」

あまり姿を現さない美しいアストロフ公は、若い年頃の貴族の娘たちにとっては憧れの人である。波打つブロンドの髪、涼しげな琥珀の瞳、ギリシャ彫刻の如く整った顔立ち、均整のとれた体格。そして何よりも23歳で独身という、野心家の貴族令嬢にとっては、あわよくば妻となり、地位も名誉も手に入れる事ができるという条件が揃っている妙齢の男性である。もちろん彼女達の親も何とかアストロフ公の気を惹こうと、盛大なパーティーを開催してはアストロフ公を招待しているが、本人は招待を受けてもいざ結婚の話を持ち出すと優雅に微笑んで柔らかくかわされるという状態である。「捉えどころのない領主」「決して手の届かない男性」という噂が定番となったが、それでも「もしかしたら…」という一縷の望みに期待をする者も少なくない。

ナディア・オレフは帰路を急いでいた。普段は馬車で教会に行くのだが、今日に限って徒歩で教会を訪れたのだ。貴族の娘らしくない行動だが、霧が出るのはいつものことだし、屋敷までさほど遠い距離ではないので大丈夫だろうと思っていたのである。いつもなら必ず彼女のお供をする乳母も一緒だが、体調を崩しているために、ナディアは一人で教会を訪れたのである。大好きな乳母が、一日でも早く元気になってくれるようにと神に祈りを捧げるためだ。

彼女は、この辺りの名士、オレフ家の一人娘としてこの世に誕生した。幼い頃に母親を亡くし、乳母が母親代わりだった。乳母はとても美しく聡明であり、年齢も20代という妙齢の未亡人で、ナディアは乳母というよりも姉のように慕っていた。父親はこの時代には珍しく愛人の一人もおらず、妻が亡くなってから何年も経った今でさえも亡き妻だけを愛し、妻の忘れ形見であるナディアを宝石のように大切にしていた。ナディアも父親をととても愛し尊敬していたが、その為、もし自分が嫁いだらこの家に一人で住む事になり、寂しい思いをするのではないかと心配しており、心密かに乳母と再婚してくれたらいいのにと思っていた。二人の様子を見ると、お互いまんざらでもないように感じる。何よりも二人が並んでいるととても自然だった。

「こんなに霧が深くなるとは思わなかったわ。やはり、馬車か馬で来ればよかったかしら。」

いつもの十字路が見えてくる。この十字路を右に曲がり、五分ほど歩けば家に着く。左側の道は、現在の領主アストロフ公の私道で、小高い丘の上に建つ公の屋敷へと続いている。

ナディアは家に帰るために右を向いたのだが、左側の道からとても芳しい香りがしてきて、何かに憑か

れたかのようにふらふらと左の道を歩き出した。小高い丘に続く道はだんだん狭くなり細くなってゆく。広大な畑や果樹園、小さな小川のある野原はいつの間にか木が生い茂る森となっていた。ナディアはただひたすらまっすぐに歩いていった。芳香はますます強くなり、森の中程に差しかかった時、群生する深紅の薔薇を見つけた。見事に咲いている薔薇は思わず息をのんでしまうほど美しかった。ナディアはしばらく見とれてからホッとため息をつく。

「十字路でほのかに匂ってきた芳しい香りは、この薔薇だったのね。こんなに見事に咲いている薔薇を見るのは初めてだわ。なんて美しいのでしょうか。え…？金の薔薇？」

真っ赤な薔薇の中に、一つだけ光のように金色に輝く薔薇を見つけたナディアは、その強烈な芳香を感じ、気を失うとその場に崩れ落ちるように倒れた。

「リュシフェ様、馬車の用意ができました。いつでもご出発できます。」

「ありがとう。うん？」

夜会服に身を包み、出発しようとして一歩歩きかけた美しい領主は、急に歩みを止めた。その眼は、外を見るようにドアを見つめていた。

「いかがなさいましたか？」

「森の中の薔薇園に人が迷い込んだようだ。ちょっと見てくる。」

「はい。お気をつけて。」

フェリアス夫妻に見送られて、リュシフェ・アストロフ公は足早に屋敷を出ていった。

「今日は霧が深いな…。」

リュシフェは霧で薄暗い中、森に続く細い道を迷わずに馬で駆け抜けていった。霧の中には小雨が混じっているのなるべく早く辿り着かなければ人はこの寒さで凍え死んでしまう。やがて森の中の薔薇園にたどり着くと、少女が倒れていた。リュシフェは素早く馬から降りるとナディアをそっと抱き起した。

「体が冷え切っている。早く温めてやらねば…。」

リュシフェはそのままナディアを抱えて馬に乗ろうとした時、金の薔薇を見つけた。一瞬息を止めたが、すぐに冷静な顔に戻り、じっとナディアを見つめた。そして再び薔薇の方に目を向けると、そこには深紅の薔薇の群生しかなかった。

「気のせいかな…さもある。私が領主になってからまだ17年しか経っていない。いや、17年も経ったというべきか…。」

リュシフェはフツと寂しげな笑みを浮かべると屋敷に引き返した。

ナディアは見たことのない部屋で目覚めた。美しい刺繍が施してある絹のシーツと枕、掛布団、レース地の布が柔らかく覆っている天蓋付のベッド。一瞬、いつの間に家に帰ったのだろうかと思ったのだが、自分の部屋とはだいぶ趣が異なっている。ふと顔を横に向けると、見たことのない女性が刺繍をしている。

「ここは・・・？」

「よかった。気がつかれましたね。気分はどうですか？」

「大丈夫です。すっかりお世話をかけてしまったようですね。あの・・・ここは？」

「リュシフェ・アストロフ公のお屋敷ですよ。お嬢様はアストロフ公の薔薇園で気を失っていたのです。それをリュシフェ様が見つけれられました。申し遅れまして失礼いたしました。わたくしは、リュシフェ・アストロフ公にお仕えしているミレーヌ・フェリアスと申します。」

ミレーヌは優しく微笑むと深くお辞儀をして挨拶をした。年の頃はナディアの乳母と同じ頃だろうか。この女性も見るからに聡明そうで美しい。彼女が醸し出している雰囲気は乳母と似ていて、ナディアは一目でミレーヌに好感を持った。

ナディアも自己紹介をしようと思ったその時、部屋の扉が開いて、とても美しく洗練された男性が入ってきた。リュシフェである。彼に一度も会った事がなかったナディアは、こんなにも美しい男性がいるのだろうかと思わず息のみ、言葉を失ってしまった。

「気分はどうですか？私はリュシフェ・アストロフです。貴女は私の薔薇園で倒れていたのです。怪我はありませんか。」

ナディアはベッドから降りて挨拶をしようとしたが、自分が寝間着姿であることに気がつき、慌ててベッドの中に戻った。

「はしたない姿を晒しまして、申し訳ございません。」

ナディアは真っ赤になりながら、さらに布団を自分の方に引き寄せた。それに気がついたミレーヌが、申し訳ございませんと謝りながら、豪華な赤いガウンを着せてくれた。寝間着1枚よりもましではあるが、それでもナディアは恥ずかしくてたまらなかった。ナディアが着ていたドレスは火の側にかけてあった。霧雨の中で倒れていたからドレスが濡れてしまっているから乾かしていますとミレーヌが説明してくれた。

「ドレスが乾くまでまだ時間がかかりそうですね。体調がよろしければ一緒に食事でもいかがですか？」

「光栄でございますが外出される予定だったのではありませんか？わたくしが勝手にアストロフ公の敷地内に入り込んだばかりに大変なご迷惑をおかけしてしまって申し訳ございません。わたくしはナディア・オレフと申します。ご挨拶が遅れた失礼をお詫び申し上げます。」

リュシフェは、躊躇しながらもベッドから降りて深々と頭を下げるナディアを見て側に近寄り声をかけた。

「外出の事ならご心配は無用です。正式に招待を受けると返事をしたわけではありません。何よりも、私は貴女と食事がしたいのです。多分・・・」

彼は少し言葉を詰まらせた後、静かな口調で言葉を繋いだ。

「多分、ここにあるドレスに着替えられるでしょう。ミレーヌ、お世話を頼む。ではオレフ嬢、いやナディアとお呼びしてよろしいかな？先に広間でお待ちしています。」

アストロフ公は優雅にお辞儀をするとナディアに礼をとり、その場から去っていく。

ナディアはこんなに美しいドレスを見たことがなかった。ドレスの色は聖母マリアの衣を思わせるような深いブルーで、襟元と広くひらいた袖口、胸下にあるリボン、裾はとても美しい紫のベルベットに金色の糸で繊細な刺繍が施されており、ドレス全体に小さなダイヤモンドが縫い付けられていた。裾は1メートル

ルほど長めの丈となっていて、床にその裾を引く様はまことに優雅である。

「思った通りだ。とてもよく似合っています。」

「わたくしはこんなにも美しいドレスを見たことはありません。」

「私の母の、亡き母の形見です。」

「お母様の…そんな大切なものをお借りするわけには参りませんわ。もう少しお時間を頂けますか？わたくしのドレスに着替えて参ります。」

「そんな事をしたら貴女が体調を崩してしまうでしょう。それに本当によく似合っているからきつと母も喜んでいてと思います。さあ、食事にしましょう。」

食事の間中2人の笑顔が絶えることはなかった。リュシフェは実に博識で、政治などの社会面から音楽や絵画など芸術面まで様々な話をしてくれた。ナディアはそれらの話に熱心に耳を傾け、わからない事は質問をした。彼が少し意地悪な質問をすると、わからないながらも一生懸命に考えて自分なりの答えを導き出した。同じ17歳の貴族の娘と比べても彼女は群を抜いて聡明で、リュシフェは心から感心した。彼女の親や家庭教師がとても優れた人物であるという事が感じられた。またその美しさも格別で、雪のように白い肌、小さな顔、アーモンドのような目、筋の通った鼻、紅を付けていなくてもほんのりとピンク色の唇。中肉中背というよりも小柄な体だが、とてもバランスがとれている。

「あまりにも楽しくて時間が経つのも忘れてしまった。まだまだ話をしていたいのはやまやまだが、貴女の父上にご心配なさるでしょう。送っていこう。ミレーヌ、ナディアのドレスは乾いているだろうか。」

「さきほど確認してまいりましたが、まだ少し湿っております。」

「それならばこのドレスを着ていけばいい。」

「お借りしてもよろしいでしょうか。」

「もちろんです。そうだ。このドレス用のマントもあったはず。ミレーヌ持ってきてくれないか？」

「そう思いましたので、ご用意いたしました。」

「さすがだな。さあ、ナディア。よく似合っているよ。」

こういふと彼は、うんうんという満足そうな笑みを浮かべながら自らナディアにコートを羽織らせた。

館の前にはすでに馬車が用意しており、リュシフェはナディアをエスコートして馬車の座席に座らせた後、隣の座席に乗り込んだ。その馬車を見送るミレーヌとその夫のジーク。

「あなた。」

「うん？」

「私はリュシフェ様の心からの笑顔を久しぶりに見ました。」

「そうだな。もしかしたらナディア様はあの方の“永遠の人”かもしれない。」

「そうね。本当なら心から祝福をしたいけれど、でもあの方の記憶は…。」

「それをいってはだめだ。運命にまかすしかあるまい。」

オレフ伯は、領主の突然の訪問に緊張をしていた。しばらくは何も行動を起こせずにいたが、我に返ると慌てて家の中へと招き入れようとした。

「いえお嬢様をお届けに上がっただけですのお構いなく。こんなに遅い時間までお嬢様をお引き止めして申し訳ありません。さぞご心配なさっていた事でしょう。私も使いを出せばよかったと後悔しています。どうかお怒りなさいませんように。私はナディアによってとても充実した楽しい時間を過ごせました。」

「いえ、幼いばかりの娘でございますので、かえってご迷惑をおかけしたのでないでしょうか。」

「とんでもない。私はお嬢様のように聡明で美しい女性に会ったのは初めてです。オレフ伯、貴公の教育がとても優れていらっしゃるのでしょうか。」

「身に余る光栄なお言葉でございます。」

「時にオレフ伯。貴公にお願いしたい事があるのですが。」

「どのような事でしょうか？」

「もしもお許し願えるのなら、できればこれからもナディア嬢を夕食にご招待したいのですが。」

一瞬オレフ伯は何を言われているのかわからなかったが、納得したというよりも驚きと不審な気持ちから目を大きく見開いた。その父とは反対に、ナディアはもしかしたらこの方にまた会えるかもしれないと、嬉しさと期待で目を大きく見開いている。そんなナディアをととても優しい眼差しで見つめるリュシフェ。そして見つめ返しているナディア。それを見つめるオレフ伯。お互いが一目惚れをしたとでもいうのだろうか？こんなにも洗練されている領主が、幼いばかりの娘に？確かに我が娘ながらその美しさは父親である自分も認めているが…。

「迷っておられるようですね。確かに正式な招待状もないのですから困惑されることは否めない。では明日、オレフ伯宛に家紋の入っている正式な招待状を持ってこさせましょう。それでは失礼します。」

その夜、ナディアは夢を見た。眠っているベッドの横にアストロフ公が佇んで見つめている夢だった。夜のせいだろうか。食事の時にもとても美しい男性だと思っていたが、月の光でいっそうその美貌が際立っていた。透き通るような白い肌と赤い唇。その姿には妖艶ささえ感じられとても人間には見えなかった。ナディアの頬から唇そして首筋にかけて優しく手を這わせていた。それからそっと頬に優しく口づけをすると姿を消した。

「リュシフェ様？」

ナディアは目を覚ましたがそこには誰もいなかった。

ルドルフ・パウル神父がアストロフ公の屋敷の大きな門扉の前に着いた時、自動ドアのように音もなく扉が開かれた。

「いつもの物を持ってきました。これをリュシフェ様にお渡し下さい。」

彼はそういって荷馬車に積んできた大きい壺1つとガラスの瓶1本をミレーヌに手渡した。

「リュシフェ様のお加減はいかがですか。森の中の薔薇が異様な位に美しく咲き誇っていましたので少々気になったのですが…」

「確かにナディア様とお食事をされている時は平常心を装っているようですが、お帰りになられた後は苦しそうになさっておいでです。夜の散歩にもお出かけになっていらっしやらないので…悩んでおられるようです。」

「その時期が来たのかもしれませんが…リュシフェ様も御年23歳になられたのですから。お聞きした様子から今年も無理のようですね。善き方向に進んでほしいと心より願っておりましたが…少しでも早くこちらをお召し上がり下さいとお伝えください。」

そういって彼は大きな壺を屋敷の厨房に持っていった。不思議な事に厨房には一人として使用人はいなかった。領主の館だということになんという異様な光景だろうか。だが、ルドルフ神父は驚きの顔一つ見せずに持参した大きな壺を食材が入れてある場所の一角に置いた。瓶は小さなテーブルの上にそっと置くとそれをじっと見つめ、絶望的なあきらめのようなため息を漏らした。

「ルドルフ神父？」

神父のその様子を見てミレーヌは不安げに顔を見つめた。あきらかにいつもの穏やかな顔とは違う。いったい何があったのだろうか。それを察したのかいつの間にかミレーヌの横に彼女の夫であるジークが立っていた。

意を決するとルドルフはその場に立っている二人を見つめ、大事そうに懐から何かを出した。それを見た途端にミレーヌは夫の胸に顔をうずめて泣き出した。ジークもまた涙をこらえるかのように唇をギュッと噛みしめ、妻を優しくいたわるように彼女の肩を支えながらそのものを受け取った。

「一森の中の薔薇園に立ち寄った時、深紅の薔薇の中にこれが咲いているのを見つけました。恐らくリュシフェ様も気づいたのでしょう。だからこそ悩み苦しんでいるのです。」

そういって彼は静かにその場から去っていった。膝をつき深く頭を下げながらその後ろ姿を見送ったミレーヌとジークの手には金色に輝く美しい薔薇の花が握りしめられていた。

ナディアは、今夜はどのドレスを着て行こうかしら？どんな話をしよう？といつものようにリュシフェとのディナーを心待ちにしながら過ごしていた。オレフ伯はそんな愛しい娘を優しく微笑みながら見つめていた。

「御機嫌よう。おじ様。」

オレフ伯はその声の主の顔を見た。そこには爽やかな笑顔の美青年の姿があった。

「ニコラエ！久しぶりだね。しばらくの間見かけなかったからどうしているかと思っていたんだよ。」

「ええ。ハンガリーに留学していたのですよ。ちょうど3ヶ月前に戻ってきたのです。その時におじ様にお願ひしたい事があって何おうと思っていたのですがもう遅すぎたようです。」

「わたしに？遅すぎとは聞きづてならないね。一体どんな願ひなのかな？話してみなさい。」

「実はナディアとの結婚を正式にお願ひしようと思っていたのです。でも残念ながらすでにアストロフ公との話がまとまっていたようなので。ご婚儀はいつなのでしょう？わたしは再びハンガリーへ行く予定

なのでナディアを祝福してから出発したいのです。おじ様？」

オレフ伯を見ると彼はニコラエから顔をフツとそらすと地面を見つめている。その目は完全に泳いでおり、答えを探るかのように地面の上をあちらこちらと彷徨っていた。

「ナディアとアストロフ公が結婚するという話はどちらから聞いたのかね？」

「それは自然にそんな話が出ていますよ。だって二人は毎日のように夕食を共にしているようですし、曇りや霧雨の日はアストロフ公の自慢の庭を二人で散策しているではありませんか。二人が並んだ姿はまさしく美しい1枚の絵の様だと評判ですよ。」

「それは、その…。」

オレフ伯のはっきりとしない答えにニコラエは不審げに質問を返す。

「まさか正式な結婚の申し込みを受けていないとかいうわけではありませんよね？それが真実ならば許しがたき事！わたしは決闘を申し込みます。」

「いや、公にはお考えがあつての事。わたしはそう信じたい。」

「そんな理由は通用しませんよ。その証拠にナディアは毎晩アストロフ公の館に出掛けて帰宅するのは夜遅く、時には夜中だというではありませんか。嫁入り前の娘、しかも貴族の娘に対して侮辱以外の何があるというのです。」

この言葉にオレフ伯は言葉を失った。確かにニコラエのいう通りである。二人が出会ってから何ヶ月か経つが、二人が会うのはいつも夜。帰宅時間が夜中になることもある。正式な招待状は毎晩来ているが、自分が呼ばれた事は一度もない。二人きりになりたいのだろうと思っていたが、もし結婚を考えているのなら親である自分にもそろそろ招待状がきてもおかしくない。だが現在までそのような事は全くない。また昼間に会えないというのもおかしい。恋している時はひとときも離れたくない。少しでも長く一緒に過ごしたいと思うものではないのだろうか。

「おじ様。わたしも話を聞いているだけです。真実はわかりませんが、二人は昼間は会っていないのですよね？」

「いや、全く会っていないわけではない。曇りの日や薄日の晴れた日は仲良く散策を楽しんでいる。」

「曇りの日や薄日の晴れた日、そして夜…太陽が空高く日差しが暖かく降り注いでいる昼間は会っていないのですね？」

「うむ。」

ニコラエはしばらく考え込むようにしてからゆっくりと口を開いた。

「おじ様。遙か昔よりこの地に伝わっている吸血鬼の伝説をご存知ですか？」

「唐突になんだね。話には聞いているが単なる伝承だろう？吸血鬼などありえない。」

「わたしとてそう信じていました。たった今迄は。しかしおじ様の話を伺って、伝承ではなく真実ではないかと思い始めました。」

そんなばかな！信じられないという顔のオレフ伯を冷静に見つめながらニコラエは話を続ける。

「よく考えてごらんささい。おかしいことばかりではありませんか。まず二人が会うのは、夜か太陽が燦々と輝いて日差しが降り注いでいる昼間ではない曇りの時である事、何ヶ月もおじ様を自分の館に招かない事、領主だというのに、アストロフ公自身が領民の前に姿を現すのはいつも曇りの日か霧の深い日だという事。それなのにこの地は問題なく統治されている。わたしのおぼろげな記憶ですが、先代の領主、すなわちリュシフェ様の父上も同様に晴れた日はその姿を現された事がなかった。いつの間にか亡くなられていてリュシフェ様が領主となっていた。確かりュシフェ様が御年6歳の時だったと思いましたが。」

「確かに君のいう通り先代のアストロフ公もそうだった。だが、伝承によると吸血鬼は不老不死だといわれているぞ。先代の面影はあるが、リュシフェ様は先代と同じ顔ではない。不老不死ならば同一人物のは

ずだろう？」

「それはわかりません。吸血鬼は人とは違う能力を持っているようですから、その未知なる力を使っているのかもしれませんがよ。」

「しかしリュシフェ様はいつもナディアと同じものを食べているぞ。毎晩のように、使用人はいつも食事を沢山作りすぎてしまい、二人とも食べきれずに残してしまうのもったいないとナディアが話している。吸血鬼なら人間の血が食事のはずだろう。」

「それはナディアが話している事で、実際におじ様をご覧になった理由ではないでしょうか？リュシフェ様の美貌ならば若い女性は料理よりもそちらに気を取られるものではないでしょうか。」

その時、美しい様子の服装をした使用人らしき男性が二人に近づいて来た。彼は恭しくお辞儀をすると優雅に手紙らしきものをオレフ伯に差し出した。そこにはアストロフ家の紋章が押されていた。

「君は当家に招待状を届けているいつもの使用人ではないな。」

「御意にございます。わたくしはリュシフェ様のお側近くに仕えさせていただいているジーク・フェリアスでございます。今宵は特別な御招待ゆえ、わたくしが当主に一任されました。まずは招待状を御確認下さいませ。その後にお返事を頂いてくるようにとの御用命です。」

ニコラエとオレフ伯は顔を見合わせた。これは偶然のタイミングなのか、それとも…？オレフ伯は招待状を開いた。

「今宵のディナーに私も招待すると。その時に話したい事があると書いてあるが。」

「はい。オレフ伯の御都合はいかがでしょうか。」

「一謹んでお受けするとお伝え下さい。」

「畏まりました。迎いの馬車は当家で手配いたします。それでは失礼いたします。」

オレフ伯は深くお辞儀をして立ち去っていくジークを見送ると重い口を開いた。

「不思議な事だ。主が美しいとその側近も美しいものなのだろうか。さてナディアにこの事を伝えなくては。」

「おじ様。食事に行かれた時にアストロフ公の様子を注意して見ていて下さいませんか？そうですね。まず鏡にうつるかどうか。吸血鬼は鏡にはうつらないといわれています。」

「しかし、あんなにも美しい公がそんな悪魔とは到底考えられないが。」

「一美しすぎますよ。あれは人間離れした美貌です。我ら人間は外見の美しさに惑わされがちです。それに吸血鬼は美貌の持ち主だとの伝承もあります。ナディアを守るためです。おじ様だって彼女が悪魔の餌食になる事をお望みではないでしょうか？わたしだって同じです。彼女を心から愛しているのですから。わたしは彼女を守りたい。」

「君の気持ちはわかった。君のいう通りにしよう。だが、もし公が人間ならば君も二人を祝福してくれるかね？」

「もちろんです。それではお願いします。わたしはアストロフ家の事を調べましょう。」

ナディアは馬から下りると大きな門扉の前に立った。思い切りその扉を叩くと扉は開かれ、そこには見知らぬ顔の女性が驚きの表情を浮かべながら出迎えた。その女性の制止も聞かずにナディアは館の中に入っていき、一際立派で華麗な彫刻を施してある大きな部屋のドアの前に進んだ。そして一息つく間もなくそのドアを開けて中に入った。

その部屋は真っ黒な分厚いカーテンに閉ざされ、外の光は完全に遮断されていた。部屋の灯りといえば、ゆらゆらと揺らめいている蝋燭の火のみである。彼女は壁にかかっている燭台を持つと、ゆっくりと中央に鎮座している豪華な寝台に近づいた。寝台の横にある小さな棚の上に燭台を置き、寝台のカーテンをそっと捲りあげて覗いてみると、そこには彼女の愛する婚約者が死人のように青ざめた顔をして横になっていた。そっと手を伸ばして顔に触れると氷のように冷たく、思わず手を引いてしまった。すると彼は何かに気がついたようにピクリと動き、ゆっくりと目を開けた。目の前の愛する女性の顔を認めると驚愕の表情を浮かべた後に苦悩の顔を向けゆっくりと起き上がった。

「ナディア。この部屋には入らないでほしいといったのに君は見てしまったのだね…。」

絶望の声とともに彼の目には涙が光っている。やがてため息とともに重い口を開いた。

「一私の秘密、いや、アストロフ家の秘密を話そう。我が家には代々伝わってきた呪われた“儀式”がある。それを目の当たりにしたのは私が6歳の時、父上から私にその地位を譲られた時だった…。」

1430年代 トランシルヴァニア。当時はリュシフェ・アストロフ公がこの地を統治していた。女性と見紛うばかりの美貌を持つ領主は、あまり人々の前に姿を現さなかったが、領地内に起こっている揉め事や問題などすべて把握しており、子細なく解決していた。姿が見えずとも治安を保ち、安定した生活を営んでいる人々にとって、彼は尊敬に値する人物であり、かつ神秘的な存在だった。彼に限らず、先代も先々代の当主も領民にとっては謎めいた一族であった。

この頃のトランシルヴァニアはハンガリー王国の一部であり、トランシルヴァニアの領主はハンガリー貴族なのだが、いつの間にか「アストロフ公」が代々の領主として支配していた。通常なら領主が新しくなった場合、何らかの形でお披露目があるはずなのだが、アストロフ公の場合は何もなかったのである。だからといって領民たちが不信感を抱くわけではなく治安も悪くなかった。ただし代々のアストロフ公の妻は、なぜか若くして早死にすることが多かった。その葬式が行われるのがいつも曇りの日か、晴天とまではいかないが薄日の射している晴れの日なので、その事が疑問点の一つでもあった。もう一つはその行動である。

アストロフ家の代々の当主達は決して広く美しい屋敷にずっと閉じこもっているわけではなかった。領民との関わりも大切にしており、ふらっと屋敷から出ては領民たちの憩いの場にも姿を現した。しかし必ず曇りの日か霧の日か夜であった。疑問というよりはそれが不思議だった。過去の事、その当時のアストロフ公にある領民がどうしてかと尋ねると美しい笑顔を見せて「太陽の熱が暑すぎて、晴れた日は苦手なのだよ。それに肌が焼けてしまったら、淑女たちに失礼だからね」と答えるだけだったという。領民たちにはわからないことだが、多分、貴族様には色々な決まり事があるのだろうとそのまま納得をしたのだった。

今は亡き先代のアストロフ公の治世の時、先代は領地内にある薔薇園に出掛けた。いつも見事に咲いている薔薇なのだが、その日の薔薇は格別で異様なまでに美しく咲き誇っていた。禍々しいほどの真っ赤な薔薇、むせ返るほどの芳香。不吉な予感がした。自分が当主となり、この地を治めるようになってから17年である。美しい妻と子供にも恵まれ、その子供はまだ6歳になったばかりだった。寒くないはずなのに冷たい汗が額に浮かんでいた。そして真っ赤な薔薇の群生の中にそれを見つけたのだった。美しく呪われ

ている悲劇の薔薇。それを震える手で切ると絶望と悲しみの涙を流し、曇りの空を見上げ、しばらくの間佇んでいた。そして暗い影を浮かべながら愛する妻と子が待っている屋敷に戻っていった。自分は神の名を口にする事も恨む事も許されない身だ。だが神を恨まずにはいられない。神よ、あまりにも突然です…。先代のアストロフ公27歳の時であった。

「お父様、お母様、お休みなさい。」

アストロフ公は部屋に戻ろうとするリュシフェに、話したい事があるから後で私の所に来るようにと短く告げた。その顔にはいつもの優しい笑顔はなく、苦悩しているような暗く悲しい顔をしていた。そんな父を見つめながら、はいと小さく答えるとその部屋から出ていった。幼い彼の小さな胸に一抹の不安がよぎった。明らかにいつものお父様と違う。何だか怖い。その気持ちは妻にも通じたのか息子が部屋から出て行った後に愛する夫に話しかけた。

「あなた？どうかなさったの。」

美しい妻は夫の様子を見て心配そうに見つめた。夫は苦悩した悲しい顔を妻に向ける。

「ルシーヌ、とうとう金の薔薇が咲いてしまった。“儀式”をおこなわなければならない…。」

一瞬、彼女は息をのんだが優しく微笑んだ。

「そうですか。では用意をしなくてはなりませんわね。」

「だが、リュシフェはまだ6歳になったばかりだ。早すぎる！きっと何かの間違いだ…。」

「いいえ、あなたの手の中にあるそれは幻ではありません。こんなにも芳香が漂っているではありませんか。」

「だが！」

妻は再び優しく微笑みながら、ゆっくりと首を横に振る。夫は妻をきつく抱きしめた。その顔には一筋の涙が流れている。

「許しておくれ。私にはなす術がない。」

「謝ることはありません。あなたと出会い、恋をして、アストロフ家に嫁いだその時からわたくしは、わたくしの運命に身をゆだねると決心したのですから。」

「長い時間、あなたを一人にはしない。私もすぐ逝くから。」

「一つだけお願い。苦しみたくないのです。やはり怖いから…。」

「決してあなたを苦しませない。約束する。」

妻は優しい笑顔を見せるとその場で気を失った。彼は忠実な執事夫妻を呼び、妻に一番美しい衣装を着せてくれと頼んだ。彼は美しい妻に優しく口づけをするとそっと二人に引き渡した。

「お父様。お呼びですか？」

リュシフェは父親に呼ばれて屋敷内にある一室に来た。そこは時が来るまでは絶対に入ってはいけないといわれていた部屋だった。意味も分からずその言葉を守り、彼は初めてその部屋に足を踏み入れた。蝋燭のほのかな灯りに照らされたその部屋はとても美しかったが、どこか冷たさを感じて思わず両手で腕を覆った。部屋の奥を見ると父親が跪いていた。

「お父様？」

彼が近づくとそこには信じられない光景が目の前に飛び込んできた。美しい母はその目を固く閉じ、体に触るとすでに冷たい屍と化していた。細い首には、何かであけられたような2つの穴の痕がくっきりとついており、その胸には代々アストロフ家に伝わってきた美しい銀の剣が杭のように深々と突き刺さっていた。ほのかな光が、剣の鞘に彫られている大天使ミカエルの顔を浮かび上がらせている。その顔はあたかもこの悲劇を裁いているように厳しい顔にも憐れんでいる顔にも見えた。

「ひっ！」

リュシフェは口を覆い思わず後ずさりをしたが、その彼の肩をしっかりと強い力がおさえつけた。上を見上げるとそこには、赤い瞳で口元には獣のように鋭い牙を煌めかせている変貌した父の姿があった。恐ろしい悪魔の牙は、容赦なくリュシフェの細い首筋を襲った。リュシフェは痛みと同時に何とも言えないほどの気持ちよさを感じながら、朦朧とした意識で父の次の行動を見つめていた。彼は血まみれになった妻の寝台に近づき、その下に設置されている深めの皿に溜まっている妻の血をワイングラスに入れると再びリュシフェの側に近づいてきた。倒れている息子をそっと抱き起すと、これを飲みなさいとそのワイングラスを口元に寄せた。だが、痛みのあまりにそれを受け取ることが出来なかったリュシフェに彼は口移しでそれを飲ませた。生暖かい母の血が体内に入ってくると体中が熱く火照り、剣で突かれたような耐えられないほどのキーンとした痛みが貫かれ涙があふれてきた。すると父は聞いた事のない言葉を唱え始めた。その言葉は体中を駆け巡り、水のように浸透していった。そして同時に、リュシフェが感じていた体の火照りや痛みはスーッと消えていき、気持ちよさだけが残り、今度こそ本当に意識が遠のいていった。薄れていく意識の中で見た父の顔は、リュシフェが大好きな優しい笑顔をしていた。

「一私は父の力によって悪夢の日から3日間も気を失っていた。私が気がついた時、私の側には喪服を来ている父がいて、静かな声で母の告別式をおこなうと告げた。」

そこまで話すとリュシフェは小さなため息を漏らし、床をじっと見つめた。愛する女性の顔を見る勇気がなかったのだ。その後には彼は一気に話を進めた。

未知なる力で晴天を予測していた父は、意図的に小雨が降る3日後に告別式を執行した事、「儀式」がおこなわれた後は当たり前のように食べていた食事を体が全く受けつけられなくなった事、薔薇あるいは動物の血液が食事になった事、ある時期が来ると動物の血液では物足りなくなり人間の血液を求めるようになる事…。

リュシフェは勇気を出してナディアの様子を窺った。思った通りに彼女は真っ青な顔をしており、その顔にはありありとした恐怖が見て取れた。

「でもあなたはディナーの時は私と同じものを召し上がっていたわ。」

「それは父から受け継いだ未知なる力によって貴女に幻影を見せていただけだ。実際はワイングラスに満たされている本来の食事“血液”を飲んでいた」

「鏡にも姿がうつっていたわ。」

「伝承の事を言っているのか？鏡にうつらないという伝承は真実ではない。」

彼は自嘲気味に話した後、ナディアの側から離れた。そしてまるで呟くように決定的な言葉を告げる。

「一人間の血液を主食としそれを求めて夜中に徘徊する卑しき者、人間に禍をもたらす悪魔、アストロフ一族とは、古より伝承されている忌まわしい不老不死の化け物、“吸血鬼”なのだよ。」

沈黙はどの位続いたのだろうか。実際はほんの数分しかたっていないのだが、リュシフェにとっては永遠に続くかと思われるほど長く感じた。辛く長い時間が続き、いよいよ耐えられなくなった彼が口を開こうとした瞬間、ナディアが背中からそっとリュシフェを抱きしめた。驚きと戸惑いの中、ナディアの小さな体を自分から離そうとするが、彼女はギュッと力を込めて離されまいと必死に縋りついた。

「私から離れなさい。」

リュシフェは自分からナディアを離れさせようとするが、彼女はよけいに力を込めて抱きついてきた。そして力強く、はっきりと自分の気持ちを伝える。

「わたくしは貴方を愛しています。」

「言ったはずだ。私は忌まわしい悪魔だと。」

「違うわ。貴方はわたくしの命よりも大切な愛しいお方。ただそれだけです。」

そういうと自らそっとリュシフェに口づけをする。リュシフェは一瞬硬直したが、すぐに口づけを返すとナディアを強く抱きしめた。二人はしばらくの間お互いをきつく抱きしめあっていた。やがてリュシフェがそっとナディアを自分から引き離す。そして悲しげに首を横にふる。

「私も貴女を愛している。そしてそれは同時に貴女を失うという事。その事がわかっているのに私はなぜ貴女と婚約してしまったのか…。私の望みはただ貴女の幸福を願う事だけだというのに。」

「それならばわたくしを離さないで。わたくしの幸福は貴方だけですもの。可哀相な貴方。どんなに自分の運命を呪っている事でしょう。どうか貴方の苦しみをわたくしにもわけてください。」

お互いの気持ちを確かめるように再び二人は固く抱きしめあった。

「神よ。最高の幸福を与えてくれた事に感謝いたします。だが同時に地獄へと導くあなたを恨みます。忌まわしいこの血筋を呪います。ナディア、君は本当にいいのか？」

ナディアはもちろんですと頷く。それを待っていたかのように、フェリアス夫妻がその部屋に入ると深くお辞儀をする。ナディアは、二人の懐に短剣が用意されているのに気がついた。多分、自分がリュシフェを拒否したらどちらかの短剣が心臓を貫いていたのだろう。そうやって自分たちが忠誠を誓った当主を守ってきたのだ。おそらくはフェリアス家代々の彼らの先祖も。リュシフェは感謝を込めて二人を抱きしめた。続いてナディアも優しい微笑みとともに二人を抱きしめる。彼らの目には涙が浮かんでいた。

「リュシフェ・アストロフ。汝はナディア・オレフ、この女を妻とし、一生涯愛する事を誓いますか。」

その部屋はルドルフ・パウル神父の落ち着いた低い声が朗々と響いていた。リュシフェの隣には花嫁衣装を身に着けたナディアの可憐な姿がある。リュシフェとナディアは、悲しい運命が二人を引き裂く前に結婚をしようと決めたのだ。同席者はフェリアス夫妻と式を挙げてくれる神父のみである。

ナディアが1人でアストロフ公の屋敷に訪れたのは1時間前の事だった。彼女が父親とのランチを終えて屋敷の庭で読書をしていた時、彼女の幼馴染であるニコラエ・シェーンブルクが突然やってきたのである。その後ろには神妙な表情の父親も一緒だった。

「ナディア。」

「ニコラエ？まあお久しぶりね。あなたは何て素敵な貴公子になったのでしょうか。」

「ありがとう。君もとても美しくなったね。」

ニコラエの褒め言葉に、ほんのりと赤くなってありがとうと小声で答えるナディアは天使のように清純で

かわいらしかった。ニコラエは逸る心を抑えながら、冷静に質問を投げかける。

「時に、君はリュシフェ・アストロフ公と婚約をしたと聞いたが本当なのか？」

「ええ。ね、お父様。」

彼女は幸せそうに輝くような笑顔を向ける。だが、その笑顔を一瞬のうちに凍りつかせるような言葉を父親から告げられ、彼女の心を貫いた。

「いや。婚約は破棄だ。お前とアストロフ公の結婚は認めない。」

ナディアは言葉を失い、幼馴染の顔と残酷な言葉を告げた父親の顔を見つめるだけである。思わず立ち上がった彼女を優しく椅子に座らせるとニコラエがアストロフ一族の秘密を話し始める。

「君が絶望的な気持ちになっているのはわかる。だが、これから話すことは全て真実なんだよ。君も知っている通り僕はハンガリー王国に留学していて、ありがたいことに国王陛下の寵愛を得て側近として仕える幸運にも恵まれた。」

彼は静かに話を続けた。王宮でナディアが婚約をすると聞き祝福する為に故郷に帰省したが、当の本人はまだ婚約をしておらず、しかも毎晩ディナーに招待され、アストロフ公の屋敷を訪れては夜遅く、時には夜中に帰宅しているという状況だった。ナディアに対してこの上ないほどの侮辱であり、自分はアストロフ公に決闘を申込むつもりだったという。もちろんナディアはそれに対して反論をする。

「それは誤解だわ。あの方はとても素晴らしい方です。わたくしを侮辱しているなんて、それを思うあなたの気がしれないわ。」

「だが、君と公は決して昼間には会っていなかっただろう？」

「いいえ。昼間にもお会いしていたわ。だからこそ、皆が婚約すると噂をたてていたではありませんか。」

「確かに。だが昼間といっても、いつも曇っている日か小雨、或いは霧のかかっている薄暗い日だろう。」

「それは…。」

「ほら。君はおかしいとは思わなかったのか？恋人同士ならば天気など関係なく普通に昼間でも会うはずだろう。」

ナディアはこの言葉に声を失う。確かにニコラエのいう事は最もである。多分、領主としての仕事が忙しいのだろうと彼女は勝手に思っていた。何故？そんな疑問を頭から吹き払うように首を左右にふる。

「あの方は領主ですもの。きっと領主の仕事が忙しいからよ。そうに決まっていますわ。」

「それは君の勝手な思い込みだ。」

今迄は優しい口調で話していたニコラエだが、きっぱりとした強い口調に変わった。

「どう考えてもおかしいと思いアストロフ家の事を調べてみた。僕を含めここトランシルヴァニアの領民は、何の疑問も持たずにアストロフ家に統治されていると思っている。しかしどんなに古い資料を読んでも、アストロフ家の事は記載されていなかった。そんなばかな事はないと、ここはハンガリー貴族が統治しているはずだと、国王陛下から賜った資料を調べ直してみたが、それにもアストロフ家の存在は全く記載されていない。つまり、アストロフという貴族はハンガリーには存在しないという事だ。」

「嘘よ。あなたの言ったことが真実だとしたらあの方はいったい誰だというの？」

「君はこの地に古くから伝承されている悪魔、吸血鬼の事を知っているかい？」

「人の生き血を吸うといわれている悪魔の事？」

ニコラエは黙って頷いたが、それを見たナディアは呆れたように小さく笑った。

「あの方がその悪魔だと？おかしなことをおっしゃるのね。だとしたら、それこそ間違えです。その証拠にわたくしとあの方は毎晩同じ食事をしていてよ。それはお父様だっただご存じのはず。実際お父様も一緒に食事を共にしましたもの。」

「彼らは人間には想像もつかないような能力があるといわれている。恐らく、食事のときはその力を使っ

たのだろう。」

「では鏡は？吸血鬼は鏡に姿がうつらないと言われているけれど、リュシフェ様はうつっていてよ。」

ニコラエはその言葉に声を一瞬詰まらせた。オレフ伯は、食事の際に鏡を確認してくれといったニコラエの言葉に従い鏡を確認してみたが、オレフ伯も鏡にうつっているアストロフ公を確かに見たとっていたからである。

「もうこの話はおしまいにしましょう。わたくしは部屋に戻りますわ。」

「待ちなさい、ナディア。話はまだ終わっていない。」

彼女は父親の一言で歩きかけた足を止めた。いつものナディアらしからぬ険しい表情をしながら、まだ何かあるのかといわんばかりに父親と幼馴染の顔を見つめる。そんな様子を見て、父親とニコラエは軽く頷きあう。そして十字を切り、小さな声で神に懺悔の言葉を唱えた。ナディアの顔はますます険しくなる。

「リュシフェ・アストロフが悪魔だという決定的な証拠がある。私とニコラエは資料に記載されていないアストロフ家の存在自体に疑問を持った。そこで許されないとわかっていながら死者を冒瀆する行為をおこなったのだ。代々のアストロフ家の墓を開いて中を確認してみた。夫人の遺体は確かにあった。しかし、次にアストロフ公の棺を開けてみたのだが、そこにはアストロフ公の姿は跡形もなかった。ただ枯れた薔薇の花が一輪あるのみだったのだ。」

「嘘よ！亡くなった方のお墓を暴くなんて、そんな行為に及んだあなた方こそ悪魔だわ！何という恐ろしい事をするのでしょうか。神父様が聞かれましたらさぞやお怒りになるに決まっているわ。」

「ルドルフ神父はご存知だ。僕等が訪ねて話をした時は友好的に協力してくれて、自ら墓に連れて行ってくださった。」

これを聞いたとたんにナディアは二人が止めるのも聞かずに血相を変えその場を去った。二人の非道な行動はもちろんだが、彼等の話も信じ難く、かといって普段から尊敬し愛している思慮深い父親が、非人道的な行動に出たのは余程の事に違いないと、ならば愛するリュシフェは本当に伝承されている吸血鬼なのか？二人の話は嘘に違いないという心と、いや真実なのかもしれないという心で揺れていた。だからどうしてもルドルフ神父に会って話を聞きたかったのだ。しかし教会にルドルフ神父の姿はなかった。そこでルドルフ神父の話が聞けないのなら自分の目で確かめようとアストロフ公の屋敷に向かったのである。

「ナディア様？いったい何事でございますか？」

「ミレーヌ。リュシフェ様はどちらにいらっしゃるの？」

「はい。書斎で仕事でございます。とてもお忙しいので本日は夜にならないとお会いできないでしょう。ご伝言があるのならわたくしがお伝えいたします。」

「本日は？本日もではなくて？」

いつものナディアらしからぬ口調にほんの少し動揺の様子を見せたミレーヌの表情をナディアは見逃さなかった。何かあると直感で悟ると、そのままミレーヌをよけて強引に屋敷の中に入っていき、リュシフェの部屋と思われる扉を開けて中に入った。そして、立派な寝台に死人のような青い顔をして横たわっているリュシフェを見たのだった。

「ここに二人の婚儀が成立した事を宣言します。」

リュシフェとナディアは幸せそうに微笑みを交わした。その笑顔は天井の光のように輝いていた。神の祝福を一心に受けたかのように。ルドルフ神父は悲しい宿命を背負った二人を決して忘れないだろうと思った。

「ルドルフ神父様。あなたがここにいる事を知ってとても驚きました。まして若い頃に別れて、先代のパウル神父に養子に出されたジークの弟だとは。」

「隠しているわけではありませんが、あまり公にしていけないだけです。個人的な事ですからね。アスト

ロフ家の事は義父より聞いておりました。そしてお世話をするようにと。それは兄も同様でしょう。無論、私達の両親もです。」

「フェリアス家とパウル家は、代々アストロフ家に執事と司祭として仕えてくれている。とても感謝している。そして、我々の悲劇を見届けてくれている唯一の証人なのだ。」

「リュシフェ様。その事はもうおっしゃらないで。わたくしはとても幸福です。その時が来ても、きっと微笑んでいるでしょう。」

最高の幸福を実感している恋人たちの時間はあまりにも短かった。そして悲劇の時は確実に近づいてきているのだった。それを示すかのように金の薔薇が密かにふるえた。

わたくしの幸福は一瞬のうちに悪夢へと変わりました

決してその日を忘れる事などできないでしょう

季節は静寂の王が支配しているかのような冬

— 12月20日の事でした…

「オレフ伯。ナディアはまだ見つからないのですか？」

「私も必死で探しているのだがなかなか見つからないのだ。一体どこにいるのか…。」

「リュシフェ・アストロフの屋敷ではないのでしょうか？」

「私もそう思って人に調べさせたのだが、妙なことに人影の1つも見当たらないという答えが返ってきただけだ。堂々としている屋敷があるだけで、人が住んでいる気配が全くないという。」

「そんな馬鹿な！確かにリュシフェ・アストロフという人物がいたではありませんか。我々の、トランシルヴァニアの領主としてこの地を統治していた。」

父と幼馴染のニコラエが必死でわたくしを探していた頃、わたくしは愛する夫と共に屋敷の

中で幸せに過ごしておりました。どうして彼等にわたくし達の姿がわからなかったのか不明

なのですが、わたくしは忠実な執事夫妻と共に静かな時を過ごしておりました。金の薔薇は

まだ枯れていません。ミカエルの剣も裁きの光を放っておりません。

ただ外に出る事だけはできませんでした…。時々、暖かい太陽の光を恋しく思う事もありま

したが、わたくしはかまいませんでした。

何故ならば愛する方と一緒にいられるのですから。

「ナディア。君にまで不自由な思いをさせてしまってすまない。これも全て私の」

「あなた、その話はやめてください。わたくしが自分で決めた事なのですから。今はとても幸せよ。」

「しかし君には太陽の暖かい光こそがよく似合う。昼間は君だけでも外に出たらどうだろう？」

「そんな事したらたちまちあなたと引き裂かれてしまうわ。わたくしにとってその事が何よりもつらいの。あなたと一緒にいられるのなら、わたくしはお父様と縁を切ることになっても悔いはないわ。」

思い返せば何という親不孝な娘だったかと反省もしましたが、その当時わたくしにとっては

夫と過ごす限られた時間が何よりも大切でございました。夫の一族の哀しくも悲惨な運命を

知ったその日からわたくしの心に悪魔が宿ったのかもしれませんが。もし夫の身を脅かすよう

な事をする人物が現れたらわたくしは迷わずその者に刃を向けたでしょう。例えそれが親や

兄弟姉妹、大切な友人であろうと…。

でもその決意は水泡のようにあっけなく破られたのでした。それもわたくし自身の落度で。

「マリアンヌ。」

「ナディア！まあ、あなたったらどこにいたの？皆、心配して必死で探していたのよ。」

「ちょっと事情があって…。婚約おめでとう。ひとことお祝いを言いたくて来たの。婚儀はいつなの？」

「12月20日よ。わたくしの婚約者は王宮に勤めているハンガリー貴族の方で、この日しかトランシルヴァニアに来ることが出来ないの。ニコラエほど素敵ではないけれど、とても優しい方よ。」

「そう。とても幸せそうね。笑顔が光り輝いているもの。本当におめでとう。」

「ありがとう。あなたもとても幸せそうだわ。それにとっても美しいわ。そう、魂の底から光り輝いているような美しさね。あなたも婚儀に出席してくれるでしょう？」

「そうね。もし出席出来たら。たとえ出席出来なくても、あなたの幸福を心からお祈りしているわ。」

「そんな。わたくしの結婚式なのよ。幼馴染のあなたに付き添いを頼もうと思っていたのに。用事があるのなら仕方がないけれど、せめて5分、いいえ、1分でも構わないから顔を見せてお願いよ。お願い…。」

ナディアが躊躇しているとマリアンヌはうっすらと涙をうかべながら必死に頼み込んだ。そんな幼馴染の頼みをどうして無下に断ることができるだろうか。終にナディアは折れて重い首を縦に振った。

「ありがとう。では、招待状を出すから何処にいるのかを教えて」

「ごめんなさい。それは言えないわ。婚儀はどの位から始まるのかしら？それにあわせて来るわ。」

「そんな常識のないことはできなくてよ。ジンフィーク家の恥になるわ。」

「では出席することは不可能だわ。ごめんなさい。でも決してあなたの幸福を願っていないという理由ではないから。それは勘違いしないでね。幸せになって下さい。」

ナディアがその場から去ろうとすると、マリアンヌがそれを止めた。招待状を渡すという。マリアンヌの側にいた使用人がすぐに招待状を持ってきた。それを受け取るとマリアンヌは自らナディアに手渡した。

「ごめんなさい。宛名も書いていないのだけど正式な招待状よ。受け取って下さる？」

「ありがとう。喜んで受け取らせていただくわ。」

「あら、とても美しい指輪をしているわね。」

「指輪？」

「ほら。あなたの左の指につけている指輪よ。」

そういって、ナディアの左手を取るとその指輪を指す。ナディアはあわててそれを隠すと、ばつが悪そうにマリアンヌから顔をそらす。

「あなたによく似合っているわ。では、婚儀の日にお会いしましょう。それまで体調など崩さないでね。待っているわ。」

「あなたもね。御機嫌よう。」

ナディアはその場を離れて行った。マリアンヌはそれをしばらく見つめていた。すると立派な馬車がナディアを迎えに来た。ナディアはマリアンヌが見ている事に気がつかずその馬車に乗った。その様子を一通り見届けた後、マリアンヌがにやりと笑った。

「ナディア、甘くてよ。」

わたくしは夫の強い勧めもあり、時々、昼間の太陽が上がっている時間に外出をしておりました。どんなに夫を愛していても、どんなに至福の時を過していても、やはり外出して体中に感じる太陽の暖かい光は心に沁みました。

本音を申しますと、出来る事ならば太陽の光を体中に感じながら愛する人と共に歩きたかった。

話が逸れてしまいましたが、わたくしのおかれている状況から、外出する際は最善の注意を払って行動をしているつもりでした。はっきりと顔がわからぬように常に薄いヴェールをかぶり、貴族達が集まるような場所は避けていました。馬車も人目のつかない場所で待機してもらい、ドレスも比較的質素なものを選びました。たまに顔見知りにも会いましたが、ヴェールをつけて未亡人のようなドレスを身に着けているわたくしがナディア・オレフだとわかる方は誰もいませんでした。

しかしその日は愚かな事に、幼馴染でありとても仲が良い親友だと思っていたマリアンヌの婚約を知り祝福をしたいと熱望したわたくしは、親友として恥ずかしくないように外出時のいつもの質素なドレスを忘れ、最高に美しいドレスを身に纏い彼女に会いにいきました。何故ならば、その時は彼女の婚儀に参加する事はないだろうと思っていたので、行方不明といわれているわたくしが美しいドレスを着て幸せな姿を見せれば彼女も安心するだろうと思ったからでした。彼女はわたくしの事を心配しているに違いないと信じておりました。

「それは確かなのか？」

「ええ、確かよ。あの指輪は間違いなくアストロフ公のものでしたわ。何回かパーティーに招待したことがあるのだけど、アストロフ公は常にはめていましたもの。それにとっても美しいドレスを着ていたし、立派な馬車も。あの馬車もアストロフ公が乗っていたものだし、しばらくの間その行く先を見送っていたらアストロフ公の屋敷の方に向かっていきました。ナディアは間違いなくアストロフ公と一緒にいると思うわ。」

「マリアンヌ、よく知らせてくれた。ありがとう。これであの化け物を退治できる。」

「忘れないでね。これも全て貴方の為よ、ニコラエ。わたくしがあのつまらないハンガリー貴族と結婚するのも、王宮で貴方と自由に会う為。跡取りの一人も産んで妻としての役目を果たしたら、後は貴方と二人で…。ああ、その日が待ち遠しいわ。わたくしの幸福はこれからだわ。」

「わかっているさ。だが、王宮に来たら君はきっと僕ではない奴を見初めるのではないかな。王宮にはハンサムで若い貴公子が山ほどいるからね。その時はそいつに嫉妬するだろうな。」

「あら、その時はその時よ。貴方の事も婚約者から色々聞いていてよ。どこそこの令嬢だとか未亡人だとか。そうそう、国王様が最も御寵愛なさっているごく近しい夫人ともお盛んだとかね。」

「それは単なる噂さ。彼女等は勝手に僕の所にやってくるからそれに応えているだけさ。」

「まあ。憎らしい方。取り敢えず、ナディアはわたくしの婚儀の日に姿を現すはず。その時にどうするかは貴方とオレフ伯でどうぞ。ちょっとした騒動なら、わたくしの夫となる人が簡単に揉み消せますから。では御機嫌よう。」

わたくしがマリアンヌの婚儀に出席するという事は、嫌でも父親や他の貴族の方達と顔を合わせる事になります。どれほど好奇の目を向けられるかと思うと自然と心が萎えました。

夫もそれを心配しておりましたが、耐えられなくなったらすぐに帰ってきなさいと優しく見送ってくれました。

ああ！わたくしはどうしてマリアンヌの婚儀などに参加してしまったのでしょうか。わたくし

の生涯においてその事だけが唯一の後悔です。

「ナディア。無事だったのか。」

「お父様…。」

涙をうっすらと浮かべながら近づいてきた父は、少しやつれているように見えた。その後ろには控えめに大好きな乳母が寄り添っていた。彼女も涙を浮かべている。どれほど自分の事を心配していたのか。その思いが嫌というほど身に染みて胸を締め付けた。

「お父様。ご心配をおかけして申し訳ありません。」

「いや、こうして会えてよかった。そうそう。私はカトリーヌと結婚したんだよ。お前は喜んでくれるだろうか？」

「勿論ですわ。わたくしは幼い頃よりその事を願っておりました。大好きなカトリーヌがお母様になってくれないかと。お父様、カトリーヌ、いいえお母様、おめでとう。心から祝福するわ。」

「ありがとう。やっと今夜は親子3人水入らずで食卓を囲めるな。」

「ごめんなさい。それは…」

オレフ伯は、口籠る娘の姿を見て、ピクリと眉毛を動かした。

「何だね、久しぶりに会えたというのにお前の返事はそれか！」

いつもの穏やかさとは似ても似つかぬような不機嫌な様子で声を荒げる父親を見て、ナディアは思わず後ずさりをした。その様子を見て、カトリーヌが優しく夫をたしなめる。

「あなた…。ごめんなさい、ナディア。お父様は本当にあなたの事を心配なさっていて、ずっと眠れなかったのよ。もちろん、わたくしもそう。もう大人だとわかっているけれど、病気をしていないかとか怪我をしていないかとか、心配でたまらなかったの。お願いだからもう何処にもいかないで。」

「お母様…。ニコラエは？」

ナディアは、ふと違和感を感じオレフ伯とカトリーヌに質問をする。幼馴染であるニコラエの姿が見当たらないのである。注意深くまわりを見回すと、年配の夫婦や若い娘達はいるが、若い男性の貴族達はいない。何かおかしい。嫌な胸騒ぎがした。ナディアはくるりと踵を返し、その場から立ち去ろうとした瞬間、両脇をがっしりとつかまれて身動きができなくなってしまった。そんな状態の中でマリアンヌが現れ、ナディアの顎を乱暴に持ち上げた。その目は幼馴染を見るような優しい目ではなく、むしろ憎しみにあふれているような冷たいものだった。

「あなたがわたくしの婚約を祝福しに来た時は驚いたわ。だって昼間に姿を現すのですもの。とっくにあなたも化け物になっているかと思っていたから。ねえ、アストロフ公夫人。ニコラエがどこにいるか、オレフ伯に代わって教えてあげるわ。彼はね、正義感にあふれている若い貴族の方達とリュシフェ・アストロフの屋敷にむかっているのよ。もちろん化け物を倒すためにね。本来ならあなたとて魔女として処刑される身だわ。何せ吸血鬼の妻なのですからね。」

「マリアンヌ。ナディアは私達に任せると約束したではないか。」

「お黙りなさい。オレフ伯。そう、処刑される場所をわたくしの婚儀という事で恩赦がでたのよ。感謝してほしいものだわね。あなたの帰るところはあのアストロフ家の立派な屋敷ではなくて、実家であるオレフ家の地下牢よ。オレフ伯、さっさとこの女を連れて行きなさい。あと、わたくしはもうマリアンヌ・ジンフィークではなく、あなたの上司であるヘーデルヴァーリ公の妻です。わたくしの名を軽々しく呼ぶことは許しません。この女を連れて早急にこの場から退席なさい。」

その頃、ニコラエら若い貴族達はアストロフ家の私有地内に入っていた。オレフ伯がいていたように人の気配が全くない。しかも侵入者を阻むかのように前方の屋敷は幻のごとくかすんで見える。一步踏み出そうとすると、何かに弾き飛ばされその場に倒れこんでしまう。

「屋敷に近づくこともできない。これも奴の力なのか。」

彼等が屋敷に一步も近づくことができずいらついていた時、急に黄金の光に覆われた。そしてかすんで見えなかった屋敷の堂々とした姿がはっきりと見えた。彼等は何が何だかわからないように、しばらくの間呆然とその場に立ち尽くしていた。

一方、ナディアはオレフ伯に連れられ自宅の地下牢に閉じ込められていた。何度も出してくれと懇願したが、父は決して首を縦に振らず、苦悩した顔で許してくれ、ヘーデルヴァーリ公の命令に逆らうことは出来ないというだけだった。

「オレフ伯。ナディアは、いえ魔女はここにいるのですね。」

「ルドルフ神父…。あなたも娘を魔女だというのですか。」

「ヘーデルヴァーリ公の御命令ですから。私はあの女を神に代わって裁かなければなりません。牢をあけてください。」

躊躇しながら牢をあけたその瞬間にオレフ伯は気を失っていた。ナディアが驚いている間もなく、どこからか白馬が現れ、ルドルフとナディアは馬上の人になっていた。

「私にしっかりつかまりなさい。私につかまっていないと落ちますよ。」

ナディアはルドルフの凜とした声にあわてて彼にしがみついた。何という速さだろうか。ナディアは乗馬の名手といわれていたが、その彼女が必死でまっぴりだと本当に振り落とされそうである。ちらっとルドルフを見るととても厳しい目をしている。その顔はいつもの落ち着いている美しい顔ではなく、とても厳しい目をした何処か近寄りがたいものだった。そんな事を思っていると馬が急に止まった。

「しまった！遅かったか…。」

前方を見るとまさにニコラエ達が屋敷の中に突入したところだった。ナディアはしばらくの間身動きができずにいたが、我に返るとルドルフの制止を振り切って、馬から飛び降り屋敷にむかった。あわててルドルフも彼女の後を追う。屋敷の扉の前では、忠実な執事夫妻が剣でニコラエ達と闘っていた。二人はかなりの剣の使い手でその顔はまさしく戦士の顔だった。

「わたくしが経験した悲劇は天罰だったのでしょうか。」

それは人間に災いをもたらす悪魔を愛してしまったわたくしに神が裁きをくださったのかもしれませんが。しかし、誰かを愛するという事は罪な事なののでしょうか。その方が人外の方であっただけ、ただそれだけではないのでしょうか。

フェリアス夫妻は剣を持って戦っておりました。しかし所詮は多勢に無勢、だいぶ疲れが見えてきたその時、何処からか突然に剣が出現するとジークの胸めがけて飛んでゆきました。それを見たミレーヌが彼をかばい前に出ましたが、無常にも剣は2人の胸を貫いたのです。2人は固く互いを抱きしめあいながらその場に倒れ込みました。彼等の命を奪ったのはニコラエ達の剣ではなく突然現れた黄金の剣でした。ニコラエ達も呆然とその様子を見ていました。次の瞬間、ギーツという重たい音と共に固く閉ざされていた扉が開きました。そこにはこの館の主、わたくしの愛する夫が立っておりました。青白い肌と異様なほど赤い唇。壮絶なまでの美貌…。それはまさしく魔性の美と呼ぶにふさわしいものでした。彼が自分の為に戦ってくれた執事夫妻の亡骸の上に手をかざすと2人の姿は透明になり、代わりに美しい金色の薔薇が2つ寄り添うように咲き、やがて震えているように揺れて金の粉となり、風に飛ばされていったのです。

「人間を消すとはまさしく人外の化け物！神に代わって成敗する！覚悟！」

ニコラエを先頭に若い貴族達がリュシフェにむかっていったが、リュシフェはそれを鼻先で笑い軽くながしてみせた。

「私はお前たち若造に殺されるほど腕はにぶっていない。命が惜しければさっさと立ち去るがいい。立ち去らねば後悔することになるぞ。失せろ！」

「黙れ！化け物め、これを見ても口を開いてられるか！覚悟せよ！」

そういうとニコラエは十字架を突き付け、聖水をかける。それはまともにリュシフェにかかったが、彼は顔をしかめるとニコラエを睨みつける。

「十字架も聖水も効かない？そんな馬鹿な！」

「愚か者！そんな子供だましが私に通ずると思っているのか。」

「では剣だ！」

ニコラエはリュシフェめがけて突進するもリュシフェは身軽な動作でそれを軽くかわす。いつの間にかちらちらと雪が降り始めた。剣を持っているニコラエに対して、リュシフェは何も武器を持っていず、素手で戦っている。しばらく揉め合っていた2人だが、やがてリュシフェがニコラエの剣を奪い、その切っ先をニコラエに向けた。

「待て！ナディアがどうなってもいいのか！」

「何っ！」

「ナディアが何処にいるか知らないだろう？私はこのまま死んでも構わないが、そうになったらナディアの居場所もわからなくなるぞ。そして私が無事に帰らなければ、ナディアは魔女として処刑される。」

「貴様！彼女に何をした？！彼女は魔女などではない。」

「それはどうかな。何せお前の妻だからな。今頃は血に飢えて暴れているんじゃないか？血が欲しい、血をくれとな。ぐっ…苦しい。」

リュシフェは長い指をニコラエの首にかけ、少しずつ力を入れていっているようだった。ニコラエの顔がだんだんと赤くなり苦痛にゆがんでいく。その時のリュシフェの目は赤く、その唇にはオオカミのような鋭い牙が不気味な光を放っていた。その姿はまさしく人外の、悪魔の形相だ。

「彼女を侮辱する事は許さん。彼女は何処だ？何処にいる？」

「それを聞いてどうする？」

「もちろん連れ戻す。答えぬとこの首をへし折るぞ。」

「あなた！」

わたくしはルドルフ神父の手を振り切って、夫の前に姿をあらわしました。彼は安心したようにため息をつきました。その顔はいつもの優しい顔でした。わたくしが駈け寄ろうとしたその時、辺り一面が黄金の光に覆われ、空から一本の剣が出現し、光によって大きな十字架の形となり、まっすぐ夫の胸に突き刺さりました。それが愛する夫との永遠の別れでした。

わたくしはその場で気を失ってしまっていたようです。意識を取り戻した時、わたくしはルドルフ神父の教会にいました。側には心配そうな顔をした父と義母、ルドルフ神父がみつめていました。不思議な事に父と義母はトランシルヴァニアの領主、わたくしの夫、リュシフェ・アストロフの事は全く知らない様子でした。現在の領主はルカ・ヘーデルヴァール公、マリアンヌの夫だと教えてくれました。わたくしの目から自然と涙がこぼれ落ちました。

夫は最期の時に優しく微笑んでおりました。わたくしはあの笑顔を、短かったけれども彼

と過ごした幸福な日々を、決して忘れないでしょう。しばらくしてから、わたくしはルドルフ神父と結婚しました。神父の妻として、心穏やかな日々を過ごしております。

時々ふと思うのですが、リュシフェの命を奪ったあの黄金の光はいったい何だったのでしょうか。わたくしが気を失う前に見たおぼろげな記憶一。

彼の胸に光の十字架が突き刺さった瞬間、彼の姿は優しい微笑みと共に消え去り、そこに残っていたのは美しい金の薔薇と、毎日のように見ていたアストロフ家に伝わるミカエルの剣でした。金の薔薇の花弁は、涙のように散ってゆきました…。

「ナディア、何をしているんだい？」

「あなた。思い出を綴っておりました。」

「—そうか。もう夜も遅い。先にお休み。私はまだ明日のお勤めの用意があるから。」

「ええ。そうしますわ。お休みなさい。」

「お休み」

2人はそっと口づけを交わすとナディアは部屋から出ていった。それを見送ってからルドルフは教会の礼拝室に向かった。礼拝室の前に着くと中からまぶしい光がもれていた。ルドルフは躊躇せずまっすぐに礼拝室に入った。

「やはり来ていたか。」

“やはり？まるで私がいるとわかっていたような話し方だな”

光の中から声が聞こえてきたが、ルドルフは驚きもせずに光の中に言葉を返す。

「わかっていたさ。ちょうどいい。1つ聞きたいことがあった。」

“何だ？”

「—リュシフェ・アストロフの命を奪ったのはお前だろう？いつもなら直接に手を下すことなどしないのに何故今回に限りお前は自ら手を下したのだ？」

“—確かではなかったが、彼は記憶を取り戻しているのではないかと思っていた。何故ならば、彼女があらわれても、なかなか金の薔薇は枯れなかった。だが結局違った。そんなことをしている間にニコラエ達に正体がばれてしまった。彼を人間の手で殺されたくなかった。”

「—そういう事か。確かに前がやらなくてもきっと私が同じ事をしていただろう。また長い時を待つしかないのだろう。」

礼拝室のまぶしい光はいつの間にか消えていた。今は蠟燭のやわらかな光が揺らめいているだけだった。

「帰ったか。」

ルドルフ神父は跪くと神に祈りを捧げた。

「で、教授が行方不明になったのは何時ごろからですか？」

「一週間位前からです。」

「一週間！？なんでもっと早く警察に届けなかったのですか？」

「それは、我々の立場というものもありますし…。」

「一週間ですよ。一週間！しかもここ、シカゴでだ！教授に何かあったらどうするんです。」

1920年～1930年代、禁酒法が施行され、もぐり酒場が蔓延し、アル・カポネやラッキー・ルチアーノが暗躍していたアメリカ。数々の殺人事件や失跡事件に見舞われ、役人は買収され犯罪に手を貸す。そんな時代のシカゴに謎の失踪事件が多発していた。失踪者は老若男女はもちろんその職業も様々である。

「教授に何があったのでしょうか？」

「そんなの知るか！大体、普通3日も姿をあらわさなかったら何かあったのかと心配して警察に届けるだろうが。」

「教授はもう亡くなっているのでしょうか？」

「その可能性もありますな。」

「そんな！何とかして下さいよ。あなたたちは警察でしょう。金ならいくらでも払いますから。」

「金の問題じゃない。おい！行くぞ。」

スミス刑事は部下とともにその場から立ち去りある場所に向かった。そこは数ある酒場の1つで、規模的にはそんなに広くない。殆どが政府の認めていない非合法的な酒場だが、ここは唯一政府が認めている酒場である。というのも、犯罪都市と化してしまったシカゴを何とか住みよい都市にしたいという、一部の正義感あふれる市民によって営業されており、その日の情報を提供していた。もちろん真実が知れたらたちまち殺害されてしまう為、毎日が命の危険にさらされている。したがって、そこで働いている従業員は皆、銃を常備しており、例え仲間が死んでも外出先では涙を見せず、自宅でその死を悼み、神に祈りを捧げる。つまり常に死と隣り合わせの生活をしているのである。必ずシカゴは平和で美しい都市になるという願いのもとに。

「よう。生きてるか。」

「お陰様でこの通り生きていますよ。縁起の悪いことを言わないで下さいよ。まだ一番下の子供が生まれたばかりなんですからね。」

「そうだったな。いつものやつをくれ。」

「畏まりました。どうぞ。」

「おう。上手いな。」

「それはどうも。で、今日はまた何か？」

「知り合いがかくれんぼをしたらしい。」

「かくれんぼですか。そのかくれんぼは何時やったんですか。」

「一週間位前なんだ。だから鬼を忘れてしまったらしくてな。その鬼に金を貸していたので返してもらいたいんだってよ。」

「それはいけませんね。ですが金の貸し借りをする位なら、とても親しい、いつも接触がある人物でしょう。」

「そうだな。よしもう一度聞いてみるか。ごちそうさん。奥さんとお子さんによろしく。」

「いつもありがとうございます。」

スミス刑事は年若い部下とともにその酒場を出た。まだ刑事になってまもない部下は慥然とした声で上司にかみつく。

「何だと思ったら、一杯酒を飲みに行っただけじゃないですか。きちんと情報を仕入れないと教授の事件は解決しない！何のために我々が命をはるんだ。この世から犯罪をなくし、一人でも多くの人々が幸せに笑って生活できる事を願っているからじゃないですか。我々は正義のために戦っているはずだ！」

「お前はいくつだ？」

「はっ?! 25ですけど？」

「25か。俺はただ酒を飲みに行っただけじゃないぞ。教授は間違いなく殺されているか人知れない場所に監禁されているだろう。」

「何故そんな事がわかるんですか？」

「俺はマスターとかくれんぼの話をしただろう？」

「ああ。鬼がどうかって言ってましたね。それとどう関係があるんですか。正直に申しますと、あの話を聞いてムカつきましたよ。何をくだらない戯言をいつているんだと思いましたね。」

「そうか。お前は俺と組んだのは初めてだったな。あの話は例えだよ。何故ならばあそこの酒場は、公には他の連中と同じ非合法の酒場ということで経営しているから誰がいるかわからないからな。早速お出ましだぞ。銃は持っているな? 離れろ！」

スミス刑事の離れろという言葉と共に後方から銃の音が響いた。しばらくの間応戦していたが、やがてスミス刑事の銃が相手の足を直撃する。と同時に襲撃してきた黒づくめの、見るだけで“組織”の人間とわかる連中が足を撃ち抜かれた仲間止めをさすと迎えに来ていた車に乗り込みその場から去っていった。

「ちっ! 相変わらず抜け目のない奴らだ。おい、生きてるか？」

前を見ると彼の若い部下が唾然とした顔をしてその場に座り込んでいる。スミスは何も言わず彼の腕をつかむと立ち上がらせた。

「言った通りだろう。だが、これで教授を拉致した連中が誰なのかははっきりとわかったぞ。もういい時間だし、奴らが戻って来ない内に家路につこうか。」

「待ってください。」

「なんだ? 怖いから家まで送ってほしいのか? しょうがないな。いくぞ。立てるか？」

「違いますよ。若い娘でもあるまいし。失敬な。」

「そうでないのなら何だ。」

「教授を拉致したのは誰かはっきりしたとおっしゃいましたが、あれだけでわかるんですか？」

「ああ。俺は何であろうとわからなければ口に出したりしない。そういう性格なんでね。」

「一体誰なんですか？」

「“ルッキーナ” さ。」

「ルッキーナって噂だけで本当に存在しているかどうかさえもわかっていないあのルッキーナですか？」

「そうだ。奴らは存在しているファミリーだ。だが、奴らは完全に自分たちの存在を隠している。よほどの財力があるのだろう。それに今見たように必ず証拠を消していく。死人に口なしだ。」

「失礼ですが、警部にも何も根拠がないではありませんか。」

「根拠はあるさ。俺は長い間ルッキーナ・ファミリーとドンパチを続けているし、お前のように組織に所属しているエリート警官じゃねえからな。そっち方面には事欠かないんだよ。」

そういうとスミス刑事はニヒルに笑い夜のネオンの中に去っていった。

一番最初に失踪したのは15歳の少女だった。比較的裕福な家庭に育った彼女は、家の近くにある公園で犬の散歩をしている最中だった。その公園は町中から離れている場所ではないし、朝早くから夕方5時位までは人々が多数往来している場所なので、少女のように犬の散歩には絶好の公園だった。さすがに夕方6時頃は薄暗くなり人数も少なくなるので、町の人間は遅くとも5時30分には帰宅した。

その日、午前中で授業が終了した少女は2:30位に愛犬と散歩に出かけた。自宅から公園、公園を一周して自宅へ戻るといういつもの散歩ルートである。愛犬を公園の中にある芝生の広場で思う存分遊ばせてから家に帰るのだが、公園は自宅からさほど遠くない場所にあるので、小一時間もあればすぐに帰って来れる距離だった。しかし少女は帰らなかった。いくらシカゴとはいえ白昼堂々と誘拐されるなどとは考えられなかった。実際、公園には思い思いにリラックスして過している大勢の人々がいた。だが、家に戻ったのは愛犬だけで、しかも夜になってからだった。家に着いた小さい犬はとても汚れていて、足に怪我を負っており何かに怯えているようだった。

次の失踪者は25歳の女性で何年か前のミス・アメリカ、次は21歳の雑誌モデルの女性、次は30歳の主婦、その次は大企業に努めている35歳のエリート社員の男性、40歳の実業家、50歳代の科学者と30代~40代の人類学者が立て続けに数10名等。彼等は、全て有名大学で研究をおこなっている、いわゆる精鋭として期待されている学者達だった。

既にその人数は20名を超えていた。誘拐であれば要求を、殺人であれば死体が見つかるなど、何か痕跡が見つかるはずだが、彼等に関しては全く何もない。人々の間では、神隠しにあったのか、それとも悪魔に消滅させられたのかというとんでもない噂が広がった。

最初は失踪しただけでは警察も動かなかった。このシカゴで財産家の子供達が誘拐されるという事は日中茶飯事だったし、それは大変だと捜査をするも本人はケロツとして2~3日で親元に戻り、事情を聞けば親しい友人と自分の家の別荘に遊びに行っていたとか、忙しすぎてあまりにも両親がかまってくれないから少し心配させたかったとかいうどうしようもない理由ばかりだからだ。だが、20名を超える人々が、立て続けに失踪したという、しかも老若男女・年齢を問わず、おまけに全く接点がない大量の人々がという不可解な今回の事件では警察も動かざるを得なかった。マフィアが絡んでいるかもしれないという事で、自ら進んで事件を解決しようと行動する骨太な刑事もいなかった。そこで白羽の矢が立ったのがスミス刑事だった。

彼はこのシカゴには珍しい正義感あふれる熱血漢だった。22歳で警察官となり、勤続年数が30年というこの道ひとすじのベテランであり、人望も厚く、本来なら警察組織の頂点にたってもおかしくないのだが、誰が何を言おうと彼自身が拒否しているのである。実際、一度役職に就いたこともあるのだが、あまりにも腐敗している本部に嫌気がさし、自分は現場の方があっていると幹部にかみつぎ、現在に至っている。そんな彼さえも第一の失踪者が出た時は相手にしなかった。しかし、もともと正義感が強く、人情味あふれる男なので、そのまま知らぬ顔をする事もできず、親身になって事件を追うことになったのである。その結果、この不可解な失踪事件と繋がったのだ。

「いらっしやいませ。」

「おう。あいかわらず男前だな。いつものやつを頼む。」

「畏まりました。それにしてもスミス刑事がこんなに早い時間からおこしとは珍しいですね。」

「今日は非番なんだ。たまにはゆっくり飲もうと思ってな。ほら。これはあんたの子供に土産だ。うちのやつの手作りなんだ。俺が言うのも照れくさいが、ああ見えて料理は天才的にうまいのさ。このクッキー

もそこら辺の店よりずっと美味しいんだ。」

「ありがとうございます。きっと喜ぶます。いつもスミスおじさんの奥さんのお菓子が食べたってわがママをいうものですから。」

「—そうか。キャシーはいくつになった？」

「10才になりました。」

「10才か。ではお前との付き合いは7年になるんだな。」

「そうなりますね。その当時はお世話になりました。」

「お世話なんかしていないさ。当たり前のことをしてただけだ。ん？」

今迄の穏やかな顔から一変してスミス刑事の目は鋭く表情が険しくなり、外をじっと見つめている。

「どうかしたんですか？」

「残念だが休みは返上だ。また来る。」

そういうやいなや、懐に手を入れて銃を確認し店を飛び出していった。彼の無事を祈り、店主は小さく十字架をきった。

「待てっ！その人をどこに連れて行くつもりだ！」

その男は小さな舌打ちと共に銃を一発撃ち逃走したが、あっという間にスミス刑事に追いつかれ銃を奪われた。スミス刑事は男が舌を噛み切らないようにすかさず男の口をハンカチで覆うとその場に押さえつける。

「娘さん。怪我はないか？」

年齢は25才位だろうか。かなり身なりのいい美人だ。驚きのあまりその場に座り込んでいたようだが、はっと気がついたようにすくっと立ち上がると1回しゃんと背筋を伸ばした後に、深く頭を下げてスミス刑事に礼を述べた。

「助けていただきましてありがとうございます。私はリーゼ・カインツと申します。この先にあるエテルニタテでショーをしております。」

「エテル、テ、テニ？」

「ごめんなさい。言いにくいですが。通称エテルです。ご存知ではありませんか？ここでは一流のパブと自負しているのですが。」

「ああ、エテルね。聞いたことはありますよ。行ったことはありませんがね。」

「それならば、ぜひお越し下さい。助けていただいたお礼に奢らせて下さい。」

「あなたのような美人に誘っていただけで光栄ですが、こいつを箱に入れなくちゃならんで失礼しますよ。おい、立てよ。話はゆっくりと聞いてやる。」

「いつでもお越し下さい。私の名前をおっしゃって下さったら良い席を用意するようにいっておきますので。あなたのお名前を教えてくださいませんか？」

「なぁに、ただの年寄り刑事ですよ。エテルといえば上流階級のVIPが集まる社交場。行く機会があれば行かせていただきますよ。タクシーでも着てビシッと決めてね。では。おい！行くぞ」

「レディース&ジェントルメン！エテルニタテにようこそ。今宵も一流シェフの料理と最高の酒と共に、我がエテルが誇る美しきスター、リーゼを中心に華やかなショータイムをお楽しみ下さい！最初にお送りいたしますのは、リーゼの歌とダンスによる“All That Jazz”！それでは It's Show Time！」

客の歓声と共に華やかなスポットライトがリーゼ・カインツの艶やかな姿を照らし出す。彼女は黒いタキシードをまとい、魅力的な声で All That Jazz を歌い、踊りを披露する。彼女は抜群のプロポーションと美貌を誇るエテルの花形スターである。艶やかな黒髪に緑の瞳、20代とは思えないほど大人びた顔、そして何処かしら寂しげな雰囲気醸し出し、それが彼女の魅力を際立たせている。誰もがこの神秘的な女性の過去を知りたがるが、どんなに酒をすすめても、彼女は決して過去の事や本心を曝け出す事はない。それ故に常連客の間では“神秘の薔薇”というあだ名がついていた。

「皆様、今宵はこの楽園、エテルニタテにようこそおいで下さいました。リーゼ・カインツでございます。一流シェフによる美味しい料理と珍しいお酒、今宵一夜を心ゆくまでお楽しみください。また別のフロアでは、ゲームやダンスをお楽しみいただけますのでご利用ください。ダンスはおなじみの楽しいチャールストンと情熱のタンゴ。わたくしも後でダンスに参加させていただく予定でございます。今宵のお相手はどなたになるかしら？それではしばらくの間はわたくしのショーをお楽しみください。」

先程のタキシードとはうって変わったしなやかなドレスに身を包み哀愁を帯びた声で情熱のタンゴを歌う。彼女の周囲では男女のダンサーが彼女の歌にあわせてタンゴを披露しているが、やがて彼女がマイクをおろすと二人の男性のダンサーがあらわれ、彼女の取り合いを始める。彼女は二人と踊っていたが、やがてひとりの男性ダンサーがドレスを外すときらびやかな飾りのついたミニスカート姿になり、哀愁を帯びたタンゴのメロディーから一変して軽やかなチャールストンのメロディーが流れ、リーゼを中心に軽快な踊りとなる。再びタンゴ、そしてリンディホップと目まぐるしく変わるステージに観客も大いに興奮している。やがてダンサー達が次々と退場し暗いステージのスポットライトにグランドピアノと黒いドレスに着替えたリーゼが浮かび上がる。

「皆様ショーは十分にお楽しみいただきましたでしょうか。それでは今夜のショーのラストとなります歌は“Stardust”お聞きください。」

静かに流れるピアノのメロディーがリーゼの声と調和して素晴らしい空間を作り出していた。今まで興奮していた客はシンと静まり返り、誰もがこの不思議な空間に引き込まれていった。

—美しい声の鳥が語るのは薔薇が咲いた楽園のおとぎ話

見る夢は儚いけれど心の中で生き続けるのは

星屑のメロディー 繰り返す愛の調べ—

Stardust の最後の旋律が余韻を残しながら静かに終わり、リーゼが膝を折り深くお辞儀をする。一瞬の沈黙の後、ブラボーの声とスタンディングオベーションと拍手のあらし。感動のあまりに涙を流す女性客もいる。それに応えてリーゼは舞台の端から端へと歩いては華やかな笑顔でお辞儀と投げキスを繰り返す。5分ほどアンコールが続いた後、リーゼは舞台より退場し再び賑やかなチャールストンの音楽とタンゴが演奏された。

「ミス・カインツ。とても素晴らしいショーと歌でしたわ。わたくしも主人もとても感動しました。ねえ、あなた。」

「もちろんだよ。私と家内の気持ちだ。一杯おごらせてくれないだろうか。」

「遠慮なくいただきますわ。ご満足いただけて何よりです。これからも楽しんでいただけますように精進いたしますので、よろしくお願い申し上げます。」

「リーゼ！とても素晴らしい舞台でした。よろしければ、ダンスルームで一曲お相手願いませんか？」

「わたくしでよろしければ喜んで。失礼ですが、お名前をお聞かせ願えませんか？」

「失礼しました。僕は、リカルド・カイヤーです。エテルニタテの事は聞いていましたが、こんなに良い店とは思いませんでした。料理も上手いし、酒もいい。何よりもあなたが素晴らしい！一目で虜になりました。あなたは人の姿を借りた女神に違いない。」

「ありがとうございます。この上もない程の贅辞ですわ。カイヤー様。あの、とても失礼ですが、カイヤーとおっしゃいましたが、あの大財閥、カイヤー家の御曹司でいらっしゃいますか？」

「ご存知ですか？嬉しいな。」

「まあ、とても無礼な事を申しました。お許し下さい。あちらにVIP席がありますので、ご案内いたしますわ。」

リーゼは、次々と話しかける人々に丁寧に言葉を返しながら、人並みを縫うようにして、リカルドを奥の席へと導いていった。その席は、それぞれ仕切られており、各席には専用の接客係が控えている。席というよりも個室のような雰囲気である。かといって完全に密室ではなく、その席からはショーがおこなわれる舞台が良く見える。もちろん、プライベートを大切にしたい顧客もいるため、ベルベット地の分厚いカーテンもついており、そのカーテンを引けば、完全に密室状態になる。

リーゼを見た接客係の若い男は、軽くお辞儀をすると、リカルドに注文を聞き、その場を去って行った。しばらくの間、リカルドはリーゼと2人きりで話をして楽しい時間を過ごしていたが、その席の接客係が戻ってきた。接客係は酒を置くと、カーテンを引き、その席を個室状態にした。リカルドは期待に胸を膨らませ、リーゼの手を取った。リーゼはそのままの状態で妖艶な微笑みを浮かべながら、静かに酒をすすめた。

「カイヤー様。お酒が来ましたわ。」

「カイヤー様なんて、他人行儀な呼び方はやめて、リカルドと呼んでください。」

「では、リカルド。エテルニタテ自慢のお酒ですよ。召し上がって。」

「酒よりも僕は君を味わいたい。」

「まあ、困った人ね。とりあえずお酒を召し上がれ。それから内緒話をしましょう。さあ。」

リカルドは渋々とリーゼから離れると、テーブルに目を向けた。するとそこには何故かグラスが3つ置いてあった。

「リカルド。実はあなたに紹介したい人がいるの。」

「紹介？いったい誰ですか？」

その声と同時に座席の後部にあるドアが開いた。そこには爽やかな笑顔をした美貌の若い男が立っていた。周りには屈強なボディガードが彼を守っていた。爽やかな笑顔とは裏腹に彼の目はぎらぎらと光っており、剣のように鋭かった。野心家の目である。リカルドはその不思議な男に圧倒され、しばらく何も話せなかった。

「紹介するわ。彼は私の義兄で、ジャン・ルッキーナ。この店のオーナーです。」

「初めまして。私の事はジャンと呼んでくれたまえ。リカルド。」

彼が握手を求めると、あわててその手を握り返す。

「初めまして。リカルド・カイヤーです。ルッキーナ財閥の事はよく両親から聞いております。お会いできて光栄です。」

「まあ、かたい話は後にして一杯飲みたまえ。うちの自慢の酒なんだ。」

「はい。いただきます。」

リカルドはテーブルの上の酒を一口飲む。続いて、ジャンとリーゼが残りのグラスを取る。

「美味い！本当にこの酒は絶品ですね。軽くて口当たりもいい。ぐいぐい飲めますね。」

「そうだろう？よかったらもう一杯どうだい？多分、君と私は同じ位の年齢なんじゃないだろうか。私は1900年8月7日生まれなんだが。」

「そうですね。僕は1902年9月15日生まれですから。」

「やっぱりそうか。いや、嬉しいな。これからよろしくお付き合い願いたいなあ。私には同じ位の年齢の友人があまりいないんだ。周りは棺桶に片足を入れているような人間ばかりなんだ。まあ、私の立場上仕方のないことだけど。」

「僕でよければ喜んで。あ…。」

「どうしたんだい？」

「失礼。急に眠気が襲ってきて…。」

リカルドはその場に倒れて眠ってしまったようだ。その様子を見ながら、接客係の若い男とジャンはにやりと笑いあう。ジャンが指をならすと、ボディガードの男達がリカルドを大きな麻袋に入れ、その場から去っていく。

「やはり、お前はいい働きをするな。リーゼ。」

ジャンが口づけをしようとする彼女を避けるように顔をそむける。

「やめてよ。さっさと店に行ってオーナーとしての仕事を果たしなさいよ。」

するとジャンは頬を打つと強引にリーゼの唇を奪い、その場に抑え込む。

「いやっ、やめっ…。」

必死に抵抗するが、若い男の力にはかなわない。いつの間にか接客係もその場からいなくなっていた。後はジャンのなすがままになるしかない。神様…。何故？

「いいか。よく聞け。どんなに抵抗しようとお前は俺の女だ。俺にさからうことは許さないぞ。先に帰っている。後で部屋に行くから鍵を開けておけ。」

「冗談じゃないわ。いい加減にして。」

「冗談じゃないさ。どんなに抱いても俺の欲望は消えない。特にお前に関してはな。できる事なら、お前を部屋に閉じ込めて、毎日でも抱いていたい位だ。あまりにも俺に反抗すればそうしてやるぞ。いっそのことそうしてやろうか？よく覚えておけ！」

そう言い捨てるジャンは嘔みつくような強引なキスをすると、その場から出て行った。リーゼの目には涙が光っていた。

ジャンは部下と共に暗い真直ぐな廊下を歩いていた。壁はきちんと計算されたかのように、一寸の隙間もなく石が積み重ねられており、歩く為の灯りとして、燭台が所々にかかっている。闇の中をほのかに照らしている蠟燭の火、わずかにある部屋の扉はまるで中世の城を思わせた。そして部屋の扉はどれも頑丈な鉄で作られており、どの扉にも小さな窓があり、そこから中の様子を眺められるようになっている。その扉の中からはうめき声や、苦しげな声、耳を貫くような嬌声が聞こえてくる。普通の人間ならば、わずかな灯りしかない薄暗い廊下と、魑魅魍魎を連想させるような不気味な声に正気を保つことはできないだろう。現にジャンの部下達は、蠟人形のような青白い顔で、その額には緊張のあまりに、大粒の冷や汗を浮かべている。

そんな中でジャンはひとりだけ顔色一つ変えずに平然としていた。彼は一つの部屋の前に来ると立ち止まり、しばらくの間たたずんでいた。他の部屋に比べるとその部屋だけは物音ひとつせず、しんと静まり返っていた。彼はチツと小さく舌打ちをすると部屋の鍵をあけ、中に入っていった。

「おい。21と01をここに連れてこい。暴れたら、腕の骨一本をおっても、銃を一発ブチ込んでも構わん。但し、殺すなよ。実験が水の泡になるからな。行け！」

青白い顔をさらに真っ青にさせながら、部下たちが去っていくのを見届けると鉄の扉を閉めて蠟燭一本しかない暗い部屋の奥をじっと睨みつけた。

ジャン・ルッキーナは、ルッキーナ財閥の一人息子として、何一つ不自由なく育ってきた。18才の時に両親が亡くなり、莫大な財産を受け継いだ。その財産に飽き足りず、麻薬の売買、高級売春宿の経営、闇オークション、銃器などの武器売買等、あらゆる違法行為を行っては成功を収め、現在は闇世界の帝王とまで言われるようになっていた。もちろん表世界ではそんな裏の顔は見せずに、若き実業家としての地位を確立しており、同じ上流階級の妻をめぐり、「愛妻家」としてもとおっており、又、その爽やかで美しい外見から、「ミスター・スマイル」「シカゴのプリンス」「貴公子」などのニックネームもつけられている。彼の冷酷な裏の顔を知っている者は、幹部として彼の手足となって働いている部下と、彼の情婦リーゼだけ。彼女は、幼い頃にルッキーナ家に引き取られ養女となった、ジャンの血のつながらない義妹である。

「ボス。21と01を連れて来ました。」

ジャンは何も言わずに、こちらに連れて来いというように、ちらっと後ろを見てから大きく前方に首を動かした。部下は黙って小さく会釈をすると後方にいる別の部下に大きく手を上げる。

「何をやる気だ！僕を離せ！君たちは一体何者だ。僕がカイヤー家の者と知っているのか！」

「何と騒がしい事だ。一緒にいるレディーに失礼だぞ。リカルド君。」

「あなたは…。これはどういう事ですか？」

「どういう事か、とは心外ですな。君は私と友人になるといつていただろう。」

「これが、友人に対する態度か！今すぐ僕を解放したまえ。」

「解放？その言葉は違うな。私は友人である君を招待しただけだよ。私の職場にね。」

「これが、職場？ふざけるな！今すぐここから出せ！」

リカルドの言葉と同時に、ジャンの手が上がり、彼が持っている杖でリカルドの頬を殴った。何度も繰り返し殴ったため、リカルドの唇は切れ、頬は紫色の痣ができ、最後には気を失っていた。生気のない顔でその様子を見ていた01と呼ばれていた女性が、いきなり興奮し始め、ウーウーという獣のような声を上げながら暴れ始めた。ジャンはそれを冷酷な目で一瞥すると、彼女が繋がれている鎖を思い切り引っ張り、前にある部屋に突き飛ばし、続けて、気を失っているリカルドを部屋の中に押し込めると鉄の扉の鍵を閉めた。

「行くぞ。今日の仕事は終了だ。お前たちは屋敷の警備に戻れ。俺はカレンが待っているティー・ルームに向かう。何でも、ヨーロッパの美味しい菓子があるそうだ。」

その時、リカルドの凄まじい断末魔の声が聞こえてきた。

「どうやら、あちらでもティー・タイムが終わったようだな。さぞや美味かったことだろう。」

その顔には、悪魔のような嘲笑が浮かんでいた。

「カレン、待たせたね。ちょっと仕事で戸惑ってしまったんだ。でも、やっと目処がついたよ。」

「お忙しいのにごめんなさい。とても美味しいお菓子なのであなたと一緒にいただきましたかったの。仕事なのに迷惑よね。」

「今日の仕事はもう終わったから大丈夫だよ。残念な事に、君と僕には子供がいない。だけどその分、君とこうして過ごせるのだから幸せだよ。いや、むしろ子供がいないからこそ、何よりも大切な君との時間が持てるのだから、子供がいない事に感謝かな。子供がいたら、君とこんな素晴らしい時間を過ごす事はできないだろうからね。愛しているよ。」

2人は熱いキスを交わし、使用人たちはそれを微笑みながら見つめている。お似合いの美男美女のカップル、まさしく理想の夫婦だと。

「さあ、お茶にしようか。そうしないと美味しい菓子ではなく、とろけるように甘い君を食べたくなくなってしまうよ。僕の女神。」

「まあ。皆の前ですよ。」

「恥じらう君は、格別に美しさを増す。いつまでも初々しい。僕は君と結婚できて本当に幸せだよ。」

「ジャン、嬉しいわ。その言葉、そっくりあなたに返すわ。私もあなたと結婚できて本当に幸せよ。本来なら、ルッキーナ家の後継者が授からない私など、離婚されても仕方がない事なのに、あなたはこうしていつまでも妻として私を愛してくれる。あなたは私の命よ。ありがとう。」

「僕こそありがとう。こんな僕についてきてくれて感謝しているよ。」

「感謝なんてもったいない言葉よ。私はただあなたを愛している、それだけ。さあ、紅茶の用意をしましょう。それともコーヒーにする？」

「紅茶がいいな。」

「すぐに用意するわ。」

穏やかなゆっくりとした時間が過ぎていく。

だが、地下室から聞こえてくる人々の凄まじい叫び声に気がついた者は、誰ひとりとしていなかった。

それは、熱い昼間の太陽が沈み、柔らかな月の光が辺り一面を包み込み始める頃だった。

地下室には黒い霧が漂い、その霧が地下室から地上に出ていった事も…。

リーゼは今夜の舞台を終えて、自分専用の楽屋で寛いでいた。きらびやかな衣装を脱ぎ、大量の薔薇を浮かべたバスタブに身を沈め、美しい緑の瞳を閉じて、華やかなショーの余韻に浸り、充実感を味わい、堪能していた。暖かいお湯から出ると白いバスローブを身につけ、鏡の前に立った。そこには、何かに絶望をしたような暗い目をした若い女がうつっていた。透き通るような白い素肌の所々に、小さい痣が見える。屋間に自宅でジャンにつけられた痕。抵抗も空しく、絶望と悲しみに打ちひしがれながら抱かれた。唇を噛みしめ、思い切り鏡に水をかけた。バスローブを脱ぎ捨てると、頭からバスタブに潜った。まるで汚いものを清浄するかのよう。

もともと、ルッキーナ家とカインツ家は同じ上流階級で、ジャンの両親とリーゼの両親は親友同士だった。つまり、ジャンとリーゼは幼馴染である。真夏は同じ避暑地でバカンスを共に楽しみ、クリスマスでは、お互いにプレゼントを交換し合い夕食を共にし、出張で子供を連れていけない時は、お互いの家に子供を預けていた。ジャンはリーゼの面倒をよくみて、実の妹のように可愛がり、リーゼもまた、彼の事を「お兄様」と呼び、実の兄のように慕っていた。その様子はとても微笑ましく、本当の兄妹のように見えた。そんな穏やかな時間を過ごしていた時に悲劇は起こったのだ。

それはリーゼが5才の時の事である。両親が出張していたので、その時もリーゼはルッキーナ家に預けられていた。

「ミス・カインツ！すぐに支度を！ご両親が事故にあわれて！急いで！」

英国に出張していたカインツ夫妻は、仕事を終了して、帰国するために自動車で港へ向かっている途中だった。前から猛スピードで走ってきた自動車に衝突され、大破し、二人は帰らぬ人となってしまったのである。その日は小雨交じりの霧が発生していたという。

写真を見ながら両親の思い出にひたっているとノックの音がした。どうぞと声を出すとドアが開いて若い女が入ってきた。うりぎね顔で綺麗な淡い金髪、あごの所に小さなほくろがあり、とても艶っぽい。

「リリス。どうしたの？もう帰ったと思っていたわ。」

「はい。帰る前にご挨拶をと思って。リーゼさんはショーの後にお風呂に入ると聞いていたので待っていました。」

「まあ。ごめんなさい。わざわざ挨拶なんていいのに。家に帰るのが遅くなってしまったわね。」

「大丈夫です。わたし、リーゼさんのファンなので。今夜のショーも素敵でした。わたしはリーゼさんのようなスターになるのが、夢なんです。こうして話せるだけでも光栄です。」

「—ありがとう。でも、若いお嬢さんがこんな遅い時間まで酒場にいるのはどうかしら。タクシーを捕まえてあげるから、早くお帰りなさい。着替えるからちよっと待っていて。」

リーゼはリリスを見送ると店を横切り楽屋に戻った。店には、いまだに何人もの客が残っていて酒やポーカー等に興じている。本当ならば店に戻り、客の相手をするべきなのだが、無視する事にした。毎晩のようにホステスとして酔っ払いを相手に、偽りの笑いを浮かべ、愛想良くしているのだから、一度くらいは自分の時間に浸っても許されるだろう。それに今夜はジャンは来ない。客を無視するという事は、オーナーのジャンの顔をつぶすことにもなる。それは、少しだけれど私にとっては最高な出来事である。彼女は密かにほくそ笑みながら楽屋で暖かい紅茶を飲んだ。彼女にとっては、この楽屋だけが寛ぐことのできる自室なのである。ふと、リリスの事を思い出した。そして呟いた。

「私のファン…ね。白々しいこと。むしろ、いつでも私は喜んであなたにこの座をゆずるわ。」

その眼は冷ややかで軽蔑の色さえ浮かんでいた。彼女は、リリスがジャンの数多い愛人の一人である事を

知っている。嫉妬という感情は全くない。それどころか彼女の望みどおり、彼からもらった宝石類や高価な毛皮など、すぐにジャンごと引き渡したいぐらいなのである。彼女の唯一の生き甲斐であるステージを除いては。

5才で両親を亡くしたリーゼは、莫大な遺産を相続するはずだったが、成人に達しておらず、財産管理人をつけなければなかった。カインツ家の親戚達は、自分こそと名乗りを上げたが、皆、カインツ家の財産目当てであり、各人がそれぞれを貶しめあい、誰一人として彼女の事を気遣う者はいなかった。もちろん、表面的には涙を流し、同情しているふりはしていた。だが、いざ蓋を開けてみると、そろいもそろっていう事は同じ。リーゼは子供だから、財産の管理はできないだろう。だから、成人するまでは自分達がきちんと財産管理をするから、リーゼはしかるべき学校で寄宿生活を送り、21才になった時に正式な相続人としてカインツ家の当主になればいい…と。言っている事は最もな話だが、彼等に財産管理を任せれば、リーゼが成人するまでに、その莫大な財産を食いつぶして破産させてしまう事は火を見るよりも明らかであった。そこで見兼ねたルッキーナ夫妻は、親友の忘れ形見であるリーゼを養女にして、自分達が義父母となった。なかば、強引に話を進めたため、親戚一同は激しく反発をしたが、あなたたちにリーゼを我が子のように命を懸けて愛せるのか、我々にはそれができる、神にかけて誓えるという言葉で何も言えなくなってしまったのだ。リーゼは幼いながらも、どんなにか義父母に感謝し、深く恩を感じ、両親のように慕っていたか…。しかし、悲劇は繰り返された。リーゼが13才の時、愛する義父母との永遠の別れが待っていた。まず義父が長い休暇を取り、郊外の狩猟地へ行った時に急性心筋梗塞で亡くなり、体調を崩していた義母が、一か月後に義父を追うようにして亡くなったのだ。そして唯一の後継者である、当時18才であったジャンがルッキーナ家の当主となり、莫大な遺産も相続した。もちろん、彼はまだ未成年であるし、当初は財産管理人を雇っていた。但し、人選はジャン自身がした。もともと成績優秀であり、幼い頃より将来のルッキーナ家の後継者として、帝王学や経済学等を身に着けていた彼は、18才にして、実質上のルッキーナ家の当主となったのである。財産管理人とて、彼が未成年という事だけで納得がいかないという親戚がいるため世間に気を使っただけで、実際の財産管理は、ジャン自らおこなっていた。18才なので大学にも通っていたため、大学と会社経営の両方をおこなっていたが、特に会社の経営に危機が訪れるとか、仕事をしているために学業がおろそかになるという事は一切なく、逆に彼の両親が経営していた時よりも、何十倍もの収入を上げ、まさしくルッキーナにかなうものはなしといわれるまでになった。それを1年で彼はやり遂げたのである。彼は、いよいよ会社の経営が忙しくなってきたため、あと3年ある大学の単位を一気に修了させ、会社経営に専念した。そんな義兄をリーゼは心から尊敬し信頼していた。

ジャンがリーゼに返したい物があると告げたのは、彼女が16才の時だった。何だろうかと思いつつも、日曜日に出かける約束をした。その日は朝早くに起こされると彼の運転で出かけた。車で10分くらいの短い距離だが、その建物には見覚えがあった。かつて、笑顔に満ち溢れ、幸福だった場所、素晴らしい思い出ばかりがある場所、そして、最大の哀しみを経験した場所。リーゼの実家、カインツ家の屋敷だった。11年も経っているとは思えないほど、よく手入れがされていて、屋敷の中の父親の書斎、家族が団らんしていたリビング、ホームパーティーを開催していた庭に続くパーティールーム等、全て当時のままだった。ジャンに案内され、かつての子供部屋に行くと、そこだけは、若い娘にふさわしい部屋にリフォームされていた。アンティークなデザインの美しい鏡台、その横にある少し小さ目な飾り棚、座り心地がよさそうな長椅子、天蓋付の大きなベッド。その横の小さなドアをあけると、中は何着でも洋服がしまっておけるような大容量なクローゼット。そこには、すでに何着か美しいドレスと高価な毛皮が入っていた。いささか16才の少女には似つかわしくはないものに、訝しく思ったリーゼはジャンに質問をすると、お前へのプレゼントだと答えた。私にはまだ早いと答えようとした時、それを察したかのようにジャンは一番手元に近い、豪華な毛皮のコートを羽織らせると、隣の寝室のある大きな鏡の前に立たせた。

「全く早いことはないさ。よく似合っている。見てみるがいい。」

確かに、そのあまりにも豪華な毛皮に躊躇はしていたが、実際に羽織ってみると、デザインは16才の少女に似合うようなかわいらしいデザインとなっていた。

「これはお前に似合うようにオートクチュールで作らせた。だが今は、暑いから必要ないな。」

そういって、毛皮を下に落とし、いきなり強引な口づけをしてきた。手は怪しげに胸のあたりをまさぐりながら、だんだん下へとおろされていく。頭が真っ白になり、パニック状態に陥りながらも必死で抵抗をすると、部屋のドアに向かって走り、ドアノブを勢いよく回したが全くびくともしない。いつの間にかメイド達の姿も消えていて、部屋には鍵がかかっていた。肩をつかまれると、乱暴にベッドに連れていかれ、服を引き裂かれた。

あの時、私の人生の全てが変わってしまった。あの男は初めから私を自分のものにするために、よい兄の仮面を被りつづけていたのだ。私は自分の実家に戻ることはできたが、それは、あの男が妻に隠すことなく、堂々と私を抱くために返しただけ。上流階級育ちの彼の妻は、義妹の様子を見てくるというだけで、あの男を信用するはずだ。人前ではかわらず、善き義兄の顔を装っているのだから。ふと、スターダストの歌詞が頭の中に浮かんできた。

私たちの愛が芽生えたばかりの頃

どのキスも煌めきに満ちていた

私は、誰かと恋をすることができるのだろうか。エテルのスター。ジャン・ルッキーナの情婦。

「そして…。」

リーゼは机の上のナイフを取り、白い腕にスッと刃をたてた。美しいルビー色をした血液が流れた。それをおもむろに口につける。

「私に人並みの恋愛など許されない。この世から去るときは、きっと地獄へいくのだろう。」

ナイフの血をぬぐうとナイフを元の場所に戻して、すっと立ち上がる。上着を着ると楽屋から出ていった。

1分も立っていないのに、その腕の傷は既に跡形もなく消えていた。

彼女が楽屋の鍵をかけた時、その衣裳部屋からコトという小さな物音が聞こえた。

—ここは何処だ？

「おい。21と01をここに連れてこい。暴れたら、腕の骨一本をおつても、銃を一発ブチ込んでも構わん。但し、殺すなよ。実験が水の泡になるからな。行け！」

—この男は誰だ。変な服装だ。いや、そもそも私は何故こんなところにいるのだ。

固く閉ざされた扉が一瞬開くと、何かが入ってきた。

—何かの気配がする。ものが腐ったような異様な匂い。獣のような唸り声も聞こえる。私の前に何かあるのか？何だ…？血…血の匂い？

耳に付くような凄まじい叫び声。生きながら引き裂かれる若い男。それを貪り喰らうこの世のものとは思えぬ者。辺り一面に漂う血の生臭い匂い。血の海の中でさらに食べ物をさがすようにウロウロしては、小さな肉片をみつけ舌なめずりをして美味そうに喰らう。

「やめろ！お前は何者だ！」

その声に反応し、新しい食べ物かとギラギラした目を向け、舌なめずりをしてはじりじりと近づいてくる化け物。よく見たらボロボロの服を着た女の姿をしている。

「お前は魔女か？ならば容赦せぬぞ。」

声とは思えぬような唸り声をあげ、飛びかかってくる女。その唇からチラリと光る鋭い犬歯。

「ギャァー！！ウー。ウー。」

「私に触れたとたんに倒れるとは…。お前は魔女ではないな。信じがたいことだが、人間なのか？」

「お…おね…お願い…。私を殺して」

苦しみ、涙を流しながら懇願する女に、そっと手をかざすと、一瞬にして穏やかな顔に戻り微笑みながら目を閉じる。そして塵となり消えていった。

「哀れな…。さぞや苦しかったことだろう。それにしても、ここは一体何だ？異様なオーラと人間のオーラが混じりあっている…。」

その男は、ゆっくりと目を閉じると両手を優雅に広げた。すると、彼の周りだけ金色の光に包まれた。

—いくつもの部屋が見える…ボロボロの服をまとったもの達…皆、先程の哀れな女のように、人間であるようで人間ではない化け物となっている。お互いを傷つけ合い、争っては殺し合い…貪り喰らっている者達…まさしく魔女のサバトのようだ…ん？この部屋は人間達のオーラだけしか感じない…

「教授。どうかお休みください。後は私達が引き継ぎますから。」

「いや。将来のある若者に人体実験の人殺しの手伝いなどさせられない。だが、私は老い先短い。おそらく死ぬまでここから出られないだろう。仮に出られたとしても、それはあの男に殺される時だ。たぶん、彼等の餌食になるのだろう。もはや彼等には、人間だったという記憶はなくなってきている。彼等の餌食にすれば、言葉通りに、跡形もなく証拠隠滅できる。そして、そんな化け物を作ったのは私だ。そういった最期こそ私に最もふさわしいだろう。」

「教授は悪くありません。あなたはあの男に脅されて彼等を作った。それが罪だというのですか。」

「その通り。人間としてあるまじき大罪を犯してしまった。どんな形だったにせよ、人を殺したという事には変わりはない。例え殺されたとしても、こんな悪魔のような実験を断るのが人間だろう。」

「しかし、愛する家族が人質に取られたのだから仕方がないではありませんか？私にも愛する妻がいます。もし、あなたと同じように妻が人質にとられたら、間違いなく悪魔のようなこの実験をおこないました。幸いにも“ラファエロ”によって妻は無事ですが、あなたは目の前で妻子を殺されたではありません

か！しかも、美しい奥さんとお嬢さんであった故にあんな…」

ーラファエロ？

「言うな！頼むからそれを言わないでくれ…頼む。」

「心無いことを言って申し訳ありません。いちばん辛いのはあなたでした。」

「ありがとう。だからこそ、君には他の若い学者達のリーダーになり、あの研究の方を進めてほしいのだよ。悪魔を作り出すのは私一人で十分だ。幸いにも彼女は我々の味方になってくれているし、君たちの研究を好意的、そして積極的に手伝ってくれている。最初に彼女が来た時は信じられなかったが…。何せ彼等をココに連れてきているのは彼女だからね。」

「一おっしやる通りですが、僕はまだ半信半疑です。あの女を心から信じる事はできない。」

「それは彼女も十分に察していると思うぞ。彼女は賢い女性だ。しかし、よく考えてみたまえ。私達のもう一つの研究、つまり、彼等を人間に戻すための研究があつたとしたら、それは裏切りになる。その裏切りがあつた男にばれたとしたら、私達は皆、即座に殺される。それも承知の上で彼女はここにきているのだらう。ましてや彼女はあつた男の情婦。想像を絶する程の暴行を受けたあげく、命を落とすだらう。それがこのシカゴのファミリーの掟だ。だが、いまだに我々はこうして生きている。以前にこんな事があつた。確か君が拉致されてくる前だつた。この忌まわしい実験が始まり、半年過ぎた時、あるひとりの人間に変化が現れた。ソレは、人間という自覚と道徳感が半分失われ、半分は人間の心を持ち続けるとも苦しんでいた。ソレはしばし人間の心を失い、それこそ悪魔のように暴れまわり、我々の手に負えない程だつた。ちょうど、そんな時に彼女が現れた。ソレはすぐさま彼女に飛びかかき、鋭い爪と牙で彼女を襲つた。彼女はどうしたと思う？」

「さあ…残酷な情景しか思い浮かびませんが。」

「彼女はソレをきつく抱きしめ、噛まれるがままになっていた。やがて、ソレは後ろに倒れこんだ。彼女の手には銃があつた。そして彼女は涙を流すと、銃で撃たれ開けられたままの目をそっと塞ぎながら、哀れなソレのため、神に祈りを捧げていた。信じ難いことだが、ソレは一瞬のうちに光に包まれて、消えていった。その時にちらっと見えた顔は穏やかに笑つていて、彼女に感謝をしているように見えた…」

「その話を聞かせてくれないか？」

背後に人の気配を感じ、いきなり聞いたことのない声が聞こえ、2人は驚きのあまり心臓が飛び出しそうになつた。

「な、何だ！あんたは何処からあらわれたんだ！ここには、誰も入つて来れないはずだ。」

若い学者はどもりながら彼を見たが、いきなり硬直したように動けなくなつてしまつた。その顔は真っ青になつている。もう一人の教授と呼ばれていた年配の男は、驚きは隠せないものの、若い学者よりも冷静さが見れた。波打つブロウズの髪、涼しげな琥珀の瞳、ギリシャ彫刻のように整つた顔立ち…。教授は、白衣の中にそっと手を入れながら、ゆっくりと絞り出すような声を出した。

「我々は、あんたを復活させるために拉致された学者だ。本当に復活するとは…」

教授は白衣の中からサツと手を出すと十字架を彼に向けた。左手には聖水を持っている。

「消えろ！！吸血鬼め！」

十字架を彼の胸にあて、聖水をかけたが、彼は微動だにせず、優雅にたつていた。

「十字架も聖水も効かない？」

教授と若い学者は、真っ青な顔をさらに青くして、ジリジリと後ろへと下がつていく。すると鉄の固い扉にぶつかつてしまつた。教授は、ハツと窓口に自分の白衣をかけると中が見えないようにした。何故かそうしなければならないと本能的に感じたのだ。そして、ゆっくりと前にいる男を冷静に見つめながら、話し始めた。驚きというよりも、戸惑つていふような顔つきだ。その顔に恐怖はなくなつていく。

「さっき話したように、我々はあなたを復活させるためにジャン・ルッキーナに拉致された。我々というのは、彼と私以外にも学者や、経営者、モデル、老人、女性や子供と様々だ。全て“吸血鬼リュシフェ・アストロフ公”を復活させるために。」

「リュシフェ…そうか。時にいまは何年なのだろう？それと、ここは何という国なのか？あなたたちの服装から見ると、私がリュシフェ・アストロフとして生きていた時代よりかなり違っているようだ。その…先程周りを調べてみたのだが、ご婦人が男の様な恰好をしているし、髪の色も短い。」

「今は1930年だ。ここは、アメリカのシカゴ。秩序と道徳とは縁遠い、暴力と腐敗にまみれた国だ。」

「500年も経っているのか…。」

しばらくの間、リュシフェはゆっくりと目を閉じて微動だにせず佇んでいた。彼の周りには、金色の光と闇の様な黒色の光が輝いている。2人の学者は、その様子を訝しげに見つめていた。すると、リュシフェはフツと目をあけた。一瞬のうちに美しい紫色から琥珀色の瞳に変わった。

「すまない。時代の移り変わりを感じていた。さて、あなたたちの話の事だが、ジャンという男は私を復活させて何をしようとしているのだ？」

「彼は不老不死といわれている吸血鬼を人工的に造り出し、彼等を操り、この世界の全てを支配しようとしている。」

「吸血鬼…か。そんなものはこの世に存在しない。その昔、宗教家が人間に秩序と道徳を与えるために作った架空の話でしかない。」

「あんたは実際にいるじゃないか！あんたの存在そのものがその証拠だ！ちきしょう！あんたのせいで僕たちは何人もの人間を、罪のない人間を殺めてしまったんだ！」

若い学者がリュシフェに掴みかかろうとするのを教授が制した。

「無礼を許してください。しかし彼が言うようにあなたは目の前にいる。この現実は何であるとは決して言えない。その…世間一般の俗事ですが、十字架と聖水は吸血鬼を退治するアイテムだと思っておりましたけれど、どうやらあなたには何の影響もない。かといって、その風貌は偽装しているものでは決してない。衣服や髪形などの事は疎い私とて、あなたの服装や髪形はその当時の、おそらくは最高のものだと見るだけでわかる。あなたは何者ですか？」

「—私は、あなたたちの知っているリュシフェ・アストロフです。500年前の人間です。」

「しかし！我々の思っている“吸血鬼”ではないようだが。」

リュシフェはフツと微笑むとそのまま背をむけた。教授は、慌ててその腕をつかむと、ほんの一瞬だけ電流が走ったように感じた。リュシフェは優しく彼の手を外した。

「—現在の私は、リュシフェ・アストロフとして生きていた時代の記憶と、この地にいる以前の記憶も断片的に残っているようだ。また一人、男が拉致された。彼を助けなくては…。」

そういうとまるで光の様な霧となり、リュシフェはすっと消えていった。2人は呆然とその様子を見つめていた。やがて、若い学者が教授にゆっくりと問いかける。

「教授。彼はいったい何者なのでしょう？」

「—私にもわからないよ。君は聖書を読むかね？」

「もちろんです。」

「—それなら“暁の輝ける子”は知っているな。」

「もちろんです。ミカエルと同等の力がある大天使だったのに、恐れ多くも神に反逆し、分をわきまえずに天に戦いを挑み、ミカエルによって敗北し、悪魔となった墮天使ルシフェルの事ですよ。」

馬鹿にしないでくださいとでもいうように、声を高くして力説する若い学者に対して、やれやれというように苦笑を少し浮かべながら、教授が口を開いた。

「その通り。私もそう思っているが、大天使ルシフェルが墮天使となった理由は様々あり、その中のひとつに、無知であった人間達に神の叡智である“光”をもたらすため、自らの意思で天から降りたという説もあるんだよ。人間風情の私にはその説が本当かどうかは判断できないが。」

「新しい人間…何処だ？急がなければ危険だ。何処にいる？居た！ん…？一人じゃない。女…。彼等が話していた女か？まずいな。しばらく様子を見よう。」

「スミス刑事。大丈夫ですか？」

ひどい暴行を受けて気を失っていたスミス刑事は、彼女に支えられて目をあけた。その腕から離れようと体を動かすが、ビクとも動けなかった。

「動いてはダメです。両足と右手の骨がおられているわ。酷い…。」

「離せ！」

「動かないで。じっとしていなさい！」

彼女はまず両足に手をかざして、しばらくの間、目を閉じていた。すると1分も経たない内に、骨を折られた両足は治り、続いて右手に同じように手をかざすと、右手も元通りに治る。続いて痣で青くなっている顔にも手をかざすと、たちまちに傷が癒えた。一通り傷の治療をすると彼女は倒れこんでしまった。

「おい！しっかりしてくれ！」

彼女は青くなって疲れた顔を、スミス刑事に向けた。力なく微笑むとゆっくりと口を開いた。

「許してください。私が、あなたをエテルに招待してしまったばかりに酷い目にあってしまって。」

「一いや。美味しい酒を飲みたいというスケベ心を出した俺が悪いんだ。まさかあんたが、奴の女だとは思わなかったからな。」

「嘘つくことが下手ですね。本当は知っていたのでしょうか？助けていただいた時も彼の罫で、私が彼の情婦だという事も。なのに何故、命の危険を冒してまでエテルに来たんです？」

「いや。本当に美味しい酒が飲みたかったのさ。エテルにはいろんな酒が揃っていると噂できいていたからな。酒飲みにとっちゃあ天国だ。」

彼女、リーゼはじっとスミス刑事の顔を見つめている。まるで全てを見通しているかのように、まっすぐな視線だ。

「参ったな。あんたにはかなわねえよ。その瞳で見つめられると嘘がつけなくなってしまう。あんたの言う通りさ。俺はどうしても、奴を逮捕してやりたくてね。」

「お許してください。こうなるとわかっていながら、わたしは…。」

「それはお互いさまってことでいいさ。」

「必ず、ここから助けますから。どうかしばらくはご辛抱ください。いけない。誰か来る！」

彼女が、外へ出ようとする様子を見て慌ててスミス刑事が声をかける。

「傷を治してくれてありがとう。だが、何でこんなことができるんだ？俺を治したら、君が危ないんじゃないか。」

「一ご心配してくださってありがとう。私は大丈夫です。でも、あなたの傷が治っているのはまずいかも。どうか大怪我をしているふりは続けてください。」

彼女はそういって、その部屋から出て行き、今にも鍵をあげようとしていた男に声をかける。

「スミスはまだ気を失っているわ。私が確かめたから、仕事に戻って大丈夫よ。」

「しかし、ボスに直接確かめろと命令されています。」

「いいから仕事に戻りなさい！忘れたのかしら？私はリーゼ・カインツ、ジャンの命令は私の命令と認識しなさい。」

「は…失礼しました。」

リーゼの堂々とした態度に押され、彼はスミス刑事のいる部屋に背を向けた。彼の姿が見えなくなるとおそらくは、鉄の扉に張り付いているスミス刑事に声をかけた。

「私の事は信用しなくてもいいですが、私の言葉だけは信じてください。必ずあなたを助けますから。それまで辛抱してください。」

そう言うと、彼女はその場から去って行った。彼女はいったい何者なのか？という疑問を残して。

地下にとらわれている、もはや人間ではなく化け物と化してしまった者たちを光の塵とし、天へと導きながら、彼女の後を追うようにして、金と黒の色をした霧が出ていった。

「マスター。何か飲み物をお願い。」

その女は大きな帽子を深く被りサングラスをはめていた。夜だというのにサングラス？男は思わず眉を釣りあげた。ここは、ラウルという若い男が経営している公共酒場である。

「ミズ・カインツ。夜なのにサングラスはないでしょう？」

「一すぐにわたしだとわかるなんて、さすがね。」

リーゼは、ニコリと笑うとサングラスを外した。彼女は、警戒しながら周囲を2～3回見回すと、誰かに聞かれないよう、ラウルに顔を近づけて小声で話した。

「今夜は“ラファエロ”としてのあなたの力を貸していただきたくて参りました。」

「なるほど。で、私は一体何を？」

「彼等を保護してほしいんです。」

「彼等？」

「待っていて。」

そうやって彼女は客席に向かうと、背の高い二人の女を連れてきた。近づいてくるにつれて、その二人は女装をしている男だとわかった。

「君は…。」

「お久しぶりです。ラウル。妻と娘は無事ですか？」

「ああ。大丈夫。私がしっかりと保護しているよ。すぐに合わせよう。そちらはスミス刑事ですね。しかし、あなたが女装するとは。」

「似合っていないのはわかっている！笑うな！」

「いえいえ。結構お似合いですよ。熟れた果実の様な熟女ぶりです。」

「黙れ。一世一代の不覚だ！」

そこに現れたのは、女装をした、地下に捕らわれていた若い学者とスミス刑事だった。三人が和やかに談笑している様をみると安心したように小さくうなずき、リーゼはそっとその場を離れようとした。それをラウルが止める。

「リーゼ、何処に行くつもりですか？」

「一わたしがやるべきことをする場所へ。ラウル、2人をお願いします。」

「リーゼさん、ありがとうございます。何とお礼を申し上げればよいのか…。私はあなたの事を誤解していました。」

「わたしは、当たり前のことをしてだけです。どうか、奥様とお子さんとお幸せに。」

彼女はにっこりと笑うと、その場から足早に去って行った。スミス刑事が、止めようと手を伸ばしたが、ラウルが、その手を遮る。

「彼女を止めないと！彼女の命が危ない！」

「止めても無駄です。例え止めたとしても彼女はいくでしょう。」

「ルッキーナは冷酷な男だ。笑いながら人を殺しそれを楽しんでいる！いくら彼女でも翌朝には死体で発見される！いや…。」

スミス刑事は何かを思い出したかのように自分の体を軽く抱きしめた。その顔は真っ青というよりは、恐怖で蒼白になっている。呼吸も荒くなり、額には冷や汗が滲んでいた。その様子を見ると、ラウルはそっと彼を軽く抱きしめた。不思議な事に気持ちが落ち着いてくる。

「彼女は大丈夫です。あなたにはわかっているでしょう。彼女は大丈夫だと。」

「ああ。そうだ。そうだった。いや、俺としたことがよけいな心配をしてばかみたいだな。」

「そうですよ。さあ、少し私の部屋で休んでください。ちょうど空いていますから。」

「いや、君の奥さんと娘さんがいるだろう。んっ？あれ…？おい！彼と抱き合っているぞ。」

「もちろんです。彼の奥さんとお子さんですからね。私はリーゼに頼まれて彼女たちを匿っていたんです。自分の妻子として。奥さんはお腹の中に新しい命を宿していましたからね。私の妻子という事にしていたんですよ。おっと、感動の再開ですが、彼等を隠さなければ。スミス刑事、あなたもですよ。早く奥にある私の部屋へ行ってください。ジャンの手下に見つかったら厄介ですからね。」

彼等は頷くと足早に奥の部屋へとむかった。それを見送るとラウルは何か呪文のようなものを唱えた。すると奥の部屋の扉が消えてなくなり、ただの壁があらわれた。

「さて…と。君はまた自分を犠牲にするつもりなのか。あの時と同じように…」

彼は、何かに問いかけるように天井を見つめた。

「リュシフェ！」

「リーゼ！無事だったのか。よかった。」

2人は固く抱き合うと口づけを交わし合った。ここは、リーゼの家の一室である。2人がいるこの部屋はつい最近リーゼが見つけた秘密部屋である。リーゼの亡き両親の寝室の中にあつた。広さが10畳ほどの部屋で、細かい刺繍がある美しい長椅子と、小さな机と椅子、天使と悪魔の争いを題材にした彫刻が施されている台座があり、その上には十字架が置かれている。机には年代物の古い聖書と、インクと羽ペンがあるだけのとてもシンプルな部屋だ。別に隠し部屋にするほど特別な部屋には見えない。ただ、天使と悪魔の争いを題材にした絵画や彫刻は数多くあるが、それらは悪魔を退治した美しい大天使ミカエルと、醜い悪魔、すなわちルシフェルが表現されているものが多い。しかし、この彫刻は醜い悪魔ではなく、美しい姿のまま、ルシフェルは何かを追うように自ら地上に堕ちていつている様子で、その手には薔薇の花が一本握られている。大天使ミカエルは、他の絵画や彫刻と同様に美しい姿で片手に剣を持っているが、剣を持っていない手は、ルシフェルを連れ戻そうとするように伸ばされており、地上に堕ちていくのを何とか止めようとしているように見える。

しばらくの間、2人は長椅子に腰掛けて、愛する人という喜びを味わっていたが、リーゼがゆっくりとリュシフェルから離れた。

「戻ってきたばかりなのにもう行くのか？」

「ええ。仕事が待っているから。」

「私達はいつになったら一緒にゆっくりと過ごせるのだろう。仕事をやめることはできないのかい？」

「わたしの生き甲斐だから。いいえ、生き甲斐だったから。今はあなたさえいてくれれば何もいらなけれど。」

「だったらやめてくれないか？一緒にどこかに行こう。君は私が命に代えても守る！」

リーゼは悲しげに微笑みながら、ゆっくりと首を横にふる。何故というように彼女を見つめるリュシフェルに絶望的な視線を向けながら、彼の手にそっと口づけをする。

「彼は、ジャンは執念深く恐ろしい男よ。そう、まるで悪魔のようにね。いくら不死身のあなたでも必ずその命を絶つ。彼はその術を持っている。そのために何年もあの恐ろしい実験を繰り返してきたのだから。いままで何人もの人間が犠牲になってきたか…。いま私がこの仕事をやめて彼の前から消えてしまったら、あなたの存在に気がつく。そうなったら最後、あなたも私もどうなるかわからない。身の毛もよだつほどの人体実験をされ、拳銃の果てに殺されてしまうでしょう。さあ、行かなくちゃ。」

彼女はそっとリュシフェルに口づけると部屋を出て行った。それを見送るとリュシフェルは何気なく机の上に

ある聖書をめくる。すると、突然何かに驚いたような顔をして台座に駆け寄った。その前で手をかざすと蓋のように台座が開いた。そしてその中には美しい剣と、古い日記。そして、金色に輝いている薔薇の花が一輪入っていた。その見覚えのある剣には大天使ミカエルの彫刻が施されている。その横の日記には、忘れたことがない愛しい人の筆跡でかかれた日記。“ミカエルの剣”と“アストロフ公夫人の日記”である。もう一度、机の上にある聖書のページをめくった。すると、聖書と思っていたそれは、聖書ではなく、人が書いた手記だとわかった。最初の1ページには、ヨハネ黙示録第12章の詩。次のページからは、かつて住んでいた天界の真実の物語。

「何故これが…？それに金の薔薇…いつどこで咲いたのだろうか？しかも最近咲いたようにいきいきとしている。いや、光り輝いている。何度も金の薔薇を見ては、絶望と悲しみに打ちひしがれてばかりいたのにこんな事は初めてだ。まさか…？それとも天の慈悲だろうか…。」

リーゼとリュシフェが出会ったのは1週間前だった。リーゼは、スミス刑事がジャンによって囚われたと知り、ジャンに気づかれぬよう密かに地下の実験部屋を訪れた時だった。スミス刑事との短い再開をした後、彼女はいつものようにショーを終了し、楽屋に戻って化粧を落として寛いでいた。すると、背後に厳しく険しい顔つきをした男が立っている姿が鏡にうつった。

「誰？ここには私以外は入れないはず！」

今にも叫びだそうとするリーゼの前に音もなく近寄ると、その男は彼女の口を手で塞ぎ、静かに話し出す。とても美しい低音の声には激しい怒りが込められている。

「静かに。お前は何者だ？先程のアレは何だ？何故大怪我をした人間を完治させることができるのだ。話によっては容赦しないぞ。答えろ！」

リーゼは、何とかその手を外すと凜とした態度で相手を見つめる。

「そういうあなたこそ何者ですか？人に名前を尋ねるときは、自分から名乗ることが礼儀でしょう？それとも下賤な者には名乗る必要などないとでも？アストロフ公。」

リーゼは背筋を伸ばすと改めてリュシフェを見つめなおした。波打つブロンズの髪、涼しげな琥珀の瞳、高貴さを漂わせている顔立ち、均整のとれた体格。何という美しい男性だろう。先程見せた怒り、瞳の色は何故か紫色だった。今も琥珀色の瞳の中にほんの少しだけ紫色が残っている。

「それは失礼した。私はリュシフェ・アストロフ。が、見たところ今更名乗らなくても私の事をご存知のようだが。」

するとリーゼは、彼の手を恭しく捧げ持つと深くお辞儀をした。

「こちらこそ、ご無礼な口をききました。改めて、わたくしはリーゼ・カインツと申します。閣下。」

「ではリーゼ。私が見たことの説明をしてもらおうか。あれは人間が起こせるような奇跡ではないと思うが？」

「確かにその通りでございますが、わたくしにもわからないのです。わたくしが生を受けたその時より授かっていたものです。これだけではありません。わたくし自身が大怪我をしても、1分もかからずに完治し傷跡も残りません。初めは喜んでおりましたが…閣下がおっしゃっていた通りに、やはり人は気味悪く思います。そのため、私は怪我をしないように気を遣うようになりました。」

リュシフェが話そうとしたその時、リーゼは人が来る！と衣装ダンスの中に彼を押し込んだ。それと同時にドアの向こうから、リリスの声がした。リーゼは衣装ダンスをもう一度見た後に、用心深くドアをあけた。

「リリス。何かご用？」

「別に用というわけではないけど。ただ、ジャンが食事に誘ってくれたから。あなたに伺いを立てようかと思って。いいかしら？」

「ご自由にどうぞ。」

「そう？じゃあ、失礼するわ。ああ。今夜は彼とホテルに泊まるから。」

そういって、勝ち誇ったような笑みを浮かべて彼女は去っていった。その様子を見て、リーゼは笑顔を隠すことができなかった。どうやら、ジャンは近頃はリリスに夢中になっているらしい。このままほっておいてくれたなら、それに越したことはなかった。彼女は鼻歌交じりに着替えをしようと衣装ダンスに近づくとハッと気がついたように慌てて衣装ダンスをあけた。しかし、そこには誰もいなかった。

家に着いて小腹がすいたので軽い食事を作っていた時、背中に人の気配を感じて、振り向いたらそこにリュシフェが立っていた。あまりにも驚いたので、リーゼは、腰を抜かしたようにその場にヘナヘナと座り込んでしまった。その様子がよほどおかしかったのか、彼は笑いながらリーゼを立ち上がらせてくれた。その瞳は美しい琥珀色でとても優しくかった。化粧を落とし、部屋着姿の自分の姿が恥ずかしくなり、彼女は思わず赤面してしまった。

「かっかっ閣下！なぜこんな所にいるんですか。いえ、それよりもどうして私の家にいるんです？誰にも見つかりませんでしたか？見つかったら大変なことになりますよ。あなたの命に関わります。」

「大丈夫だろう。500年前の服装で、外を歩いていたほうがおかしいじゃないか。」

「閣下！あなたにはジャンの恐ろしさがわかっておりません。ジャンに見つかりでもしたらただではすみませんよ。ああ、どうしよう。」

「大丈夫。あの男が来たら逆に成敗してくれる。あなたの事は私が守ろう。」

「私の事はどうでもいいんです！閣下の命が危ういのです。あなたにもしもの事があつたら私は生きて…」ハッと口を噤むと、くるりと向きを変えてリュシフェに背中を向けた。何ということかを言ってしまったのかしら。その顔は恥ずかしさで赤くなっている。リーゼは、リュシフェが醸し出している崇高な、近寄りたがたい高貴さ、美しさ、何よりも美しい琥珀色の優しい目に一目で恋してしまったのである。するとリュシフェは、リーゼを後ろからそっと優しく抱きしめた。離してと小さな声で言うと、さらに深く抱きしめてきた。

「不思議なものだ。私もあなたと初めて会った時から一目で恋に落ちてしまったようだ。」

「私にそんな資格は…」

リーゼは優しく口づけをされたので、その先の言葉は言えなかった。優しく慈しむように愛がこもっている心の底からのキス。

「何も言わなくていい。私達の間には“愛”という言葉しか存在しない。」

リーゼは、子猫のようにそっとリュシフェの胸に身を寄せた。彼女の目には涙が浮かんでいた。

一見る夢は儂いけれど 心の中で生き続けるのは、星屑のメロディー 繰り返す愛の調べ…

リーゼはいつものように楽屋で寛いでいた。隣には愛する男性が優しく微笑みながら座っている。その相手に微笑みを返しながら、少し怒りながら声をかける。

「リュシフェったら、危ないといっているのに。お願いだから無茶なことはしないで。」

「わかっている。だが、ずっと君の側にいたいのだ。そうしないと今迄の哀しい別れを思い出し、とても不安になるのだ。愛する人を失ってしまうという苦い経験を何度も何度も繰り返してきたのだから…。君までも失いたくない。」

「リュシフェ。」

リーゼは優しくリュシフェを抱きしめた。しばらくそのままでいたが、何かを思い出したようにリュシフェが口を開いた。

「そうだ。君に聞きたいことがあったんだ。」

「何かしら？」

リュシフェはリーゼから離れると何かを唱えた。彼の周りが光り輝くと、何処からか美しい剣と聖書の様

な本が現れた。本来ならばありえないと驚く事だが、何故かリーゼは平然としている。何もかもわかっているかのような眼差しを浮かべながら。その様子にリュシフェは躊躇したが、何故か彼女なら在り得ると
いう思い、いや、確信を感じながら静かに話し始めた。

「この剣と本をあの部屋で見つけた。君はこの2つが存在していた事を知っていたのかい？」

「いいえ。でもその剣は“ミカエルの剣”という名前で、その聖書のような本は誰かの“手記”であるという事はわかるわ。何か懐かしいような…。何故かしら？いけない！早く姿を隠してルシフェル！」

それとほぼ同時に楽屋の部屋のドアが開かれ、リリスが入ってきた。何かを見つけようとするように、周りを見回しながら口を開く。他人のものだというのに何の遠慮もなく衣装ダンスをあける。

「誰かと話していたようだけど？」

「気のせいでしょう。それよりいきなり入ってきたと思ったら、突然、人の部屋を探るなんて失礼にもほどがあるでしょう。」

リリスはフンと鼻を鳴らしただけで、謝ろうともせずに楽屋から出て行く。その顔には不敵な笑みを浮かべている。リーゼは底知れない恐ろしさを感じ、体が冷たくなっていった。

—例え何があったとしても、あの人は私が必ず守って見せる。絶対に！

「ねえジャン。寝物語に面白いことを教えてあげるわ。」

「何だ？」

「リーゼの事よ。」

すると、寝ているベッドから飛び起きると、今にも殺しそうな恐ろしい顔つきでリリスをにらむ。ジャンはまだあの女に未練がある。私がいるというのに。リリスは激しい嫉妬を隠せずに言葉を吐き出した。

「あの女、男がいるわ！あんたにこんなに世話になっているというのにね。」

ジャンは、いきなりリリスの頬を2～3回たたくと首をしめながら怒鳴った。

「黙れ！リーゼが俺を裏切るわけがない！いい加減な事を言うところの首をへし折るぞ。」

リリスはその手を放そうとしながら、言葉を続ける。

「嘘じゃないわ。だって私、この耳でしっかりと聞いたわ。あの女の楽屋の前で！確か、リュシフェとかあの部屋で見つけた何とかの剣とか本とか話していたよ！」

ジャンは、思い切りリリスを突き飛ばすと、服を着てその部屋から出て行こうとした。そのジャンの足に縋りつきながら、リリスは必死に出て行こうとするのを止める。

「あんな女、もうどうでもいいでしょう！あなたには私がいるじゃない！行かないで。何よりもあなたを愛している。あなただって！」

ジャンはリリスを蹴飛ばして、自分から離すとその前髪を鷲掴みにする。

「愛だ？ふざけたことを言うな。俺はお前をはじめ、妻や数々の愛人を愛してなどいない。俺に言わせれば、皆、単なる娼婦、俺に尻尾をふる醜い雌豚どもだ。しいて言えば、リーゼだけが愛しているといえる唯一の女だ。勘違いするな。このバカ女め！」

—そういうと切れて唇から血が出るほど頬を打ち、部屋を出ていく。 —殺してやる！

いつものようにカウンターでカクテルを作りながら、ラウルはピクリと眉を動かした。

「マスター？いったいどうしたんだい？急に難しい顔つきをして。」

「私が？気のせいですよ。さあできました。オリジナルカクテルをお楽しみください。」

—不穏な空気が闇のように辺りを包み込んでいく…。

夜のシカゴの町に銃声が鳴り響く。男の体が金の光に包まれ炎のように暗闇に広がる。彼の美しい紫の瞳から、涙があふれている。彼の背には大きな6枚の羽根があった。銃を持っていた男と女は、一瞬にしてその場に倒れ込む。

「マリア！」

吹きすさぶ夜風の中、彼の声が空しく響き続けた。

「リュシフェ！何処にいるの？あなたは無事？！」そんな声と共にリーゼが、息せき切って家の中に入ってきた。恋人は驚きながら彼女を見つめる。リーゼはその姿を確認したが、その存在を確かめようとするようにきつくリュシフェを抱きしめた。暖かい胸、力強く響く心臓の音。リーゼは安心したようにホッと息を吐く。

「リーゼ、どうしたんだい？私は、ほら、どこも何ともない。」

「あなたの事をリリスに知られてしまったわ。きっと今ごろはジャンにもあなたの情報が伝わってしまっている。ああ！一番恐れていたことが起こってしまったわ。必ずジャンはやってくる！」

「大丈夫だ。彼に私は殺せない。人間ならば、誰も殺すことなどできないさ。私を殺せる者はただ一人だけ、私の竹馬の友ともいうべき者だけだ。」

リーゼはギュッとリュシフェを抱きしめながら静かに首を横にふった。

「いいえ。人間でもジャンならあなたを殺せる。信心の心など全くないあの男なら！」

「リーゼ、いったいどういう意味だ？」

「とにかくあの部屋から外へ出てラウルの店に行きましょう！いますぐに！ミカエルの剣と本を持って。あなたなら、あの剣を光に変えて人の目には見えないようにできるはず。本は、私がバックの中に入れて持っていくから。時間がないわ！」

リーゼはいったい何者なのだ？再びそんな疑問を持ちながら、慌ただしく二人は秘密の部屋に向かった。台座の前に行くときリーゼが手をその扉にかざす。リーゼの周りに光の金色のオーラが輝きを放つ。リュシフェは声を失った。扉があくとリーゼがミカエルの剣をリュシフェに渡し、何かを促すように軽く頷く。そうされるがままに、リュシフェはミカエルの剣を金の光で包み込んだ。すかさずリーゼが本を自分のカバンに入れ、二人は隠れ部屋の中にある外へと続く隠し扉をあけると駆け出した。リュシフェは隣で走っているリーゼをチラと横目で見たが、その姿はもういつものリーゼになっていた。私が見たのは幻だったのか？彼女は確かに私と同じ、光の金色のオーラを放っていた…

「リーゼ！何処だ？！リーゼ！！」

ジャンは次々と乱暴に部屋のドアをあけながら彼女の部屋の前に来ると、そのドアを蹴飛ばして入ってきた。さらに奥にある寝室のドアを開けると、ツカツカと大きな足音でベッドに近づいた。布団を引きはがすと、そこに横たわっていたものをグイと乱暴に起こした。

「ちきしょう！許さん！！」

ジャンは乱暴にそれを放り投げると、銃で乱射した。それは等身大に折りたたんだ洋服や布の塊だった。彼はリーゼの家を出ると、部下達にリーゼを探し出し何としても自分の所に連れて来い、と命令をした。自分も探すが、抵抗すれば怪我をさせても、銃で撃っても構わない、ただし殺すな。あれの命は俺が処分する、と。彼と彼の部下達はいつせいにシカゴの町に散らばった。そんな様子を影から密かに見ている女がいた。その女は不敵な笑いを浮かべると、懐から銃を取り出した。

「そう。銃で撃っても構わないのね。それがたまたま心臓にあたっても仕方ないわね。」

女もまた、シカゴの町に向かって行った。

「来る。必ず2人はここに来る。そして、招かれざる者達も…。」

「何だ。今夜はもう閉店かい？残念だなあ。」

「申し訳ございません。今夜は私的な用事がある。また明日お越してください。」

「仕方ないな。今夜は退散するよ。ラウル、明日は美味しいものを飲ませてくれよ。」

「はい。ありがとうございました。」

ラウルは、最後の客の姿が見えなくなるまで見送ると、すぐさま看板を店の中に片づけた。それとほぼ同時に2人の男女が滑り込んできた。ラウルは、用心深く外の様子を見回すと店のドアの鍵を閉めた。

「大丈夫です。外には“まだ”誰もおりません。ですが、彼等はすぐここに来るでしょう。ご用心なされませ。」

その言葉を聞くと、二人は全身を覆っていた黒マントを脱いだ。男は不審げな視線をラウルに向けると、女をかばうように女の前に立った。男の瞳は僅かに紫色がかっている。

「まるで私達が来るのをわかっていたような口のきき方だが？」

「御意。おなつかしゅうございます。」

「私はお前を知らない。しかし、お前はまるで私に会ったことがある様だな。何者だ？」

今にも、争いが始まりそうな気配に女が口を出した。

「勿論、彼はあなたのことを知っていますわ。だってあなたの部下でしたもの。ねえ、ラファエル。」

「リーゼ？何を言っている。私の部下？何の事だ。」

「あら。変ね。でも、何故かそう思ったの。ラウル。あなたが裏の仕事をする時の名前、人を保護したり、逃走を助けたりする時の名前は“ラファエル”だけど、それはあなたの本質というか、本来の役目、旅人の守護者“ラファエル”、あなたの真の名前…あら？わたしたたらまた何を言っているのかしら。」

その言葉にリュシフェは、ラウルの顔を見つめる。

「本当に“ラファエル”なのか？」

ラウルは御意と一言いうと、深くリュシフェの前に跪いた。リュシフェはそんなラファエルの肩の上にそっと手をおいた。

「よしなさい。今はお前に礼を取られるような身分ではない。私といたらお前が困ることになるだろう。何せ私は反逆者だからな。すまない。」

「何をおっしゃいます。あなたは私の敬愛するお方。それは今も変わりません。きっとこれからも。」

「ありがとう。しかし…」

その時、複数の足音や人声が聞こえ、店の外が騒がしくなった。

「いけない！奴らが来たようです。早くお二人は部屋の奥へ入ってください。」

「おい！いるのはわかっている！出て来い！」

ジャンの部下達が店のドアを乱暴に叩く。動物の勘とでもいうのか。ジャンはこの店にリュシフェとリーゼがいる事を最初から分かっていたようだった。ジャンの声と共に、店の鍵を壊そうと一斉にたたき出す。

「もうだめだわ。あなたたちを絶対に殺させはしない！今までありがとう。」

「リーゼ？」

2人が止める間もなく彼女の姿が消えた。しかし、店のドアは閉まったままである。外からは女がいたぞという声が聞こえてきた。店の中から外の様子を見ると、そこには、リーゼとジャンの部下たちが睨み合っ立っていた。ラウルに迷惑をかけないようにと、リーゼがその場から離れようと走り出した。それと共に、何発もの銃声が響き渡る。

「リーゼ！」

叫び声と共にリュシフェは姿を消すと、その後をラファエルが追う。そして、金色の光が3人の後を追うように続いた。

ジャンの部下につかまったリーゼの心の中にはスターダストの切ない詩が浮かんでいた。

—そして今、紫色に染まる夕闇が
私の心の草原を静かに横切り
空高く昇る小さな星たちが
会えぬ君を絶えず私に思い出させる

「リーゼ。よくもこの俺を裏切ってくれたな。さて、どうしてくれようか。」

リーゼは両腕をジャンの部下につかまれながら、ジャンをキッと見つめている。何という美しい女なのだろうか。死を前にしているかもしれないというのに、俺に命乞いもしなければ無様に泣き叫ぶ事もしない。この女を諦めろというのか…そんな事、出来やしない。俺なりに彼女の事を愛してきたのだ。子供のころからずっと、だ。金や、高価な宝石、美しい衣装、何でも与えたつもりだった。俺の何が悪いのか。

ジャンがリーゼに一歩近づいた時、リュシフェがその姿をあらわした。来ないで！という叫びと共に、リーゼは力を振り絞ると、2人の屈強な男の腕を振り払い、リュシフェを庇おうと彼の前に走り出した。それと同時にジャンの銃声が鳴り響き、無情にもその弾丸はしなやかなリーゼの体を貫いた。リュシフェは、リーゼという叫びと同時にその体を抱きとめる。リーゼは助かるはずだ。絶対に！しかし、彼女の顔は青ざめてピクリとも動かない。

「そんな！お願いだ。目をあけてくれ。君はどんな怪我をしてもすぐに治癒すると…！」

その時、フツとリーゼが目をあけた。その瞳が、緑色から藍のように深いブルーに変わっていく。

「この弾丸は、あの男があなたを確実に殺すために開発した特殊なものです。だから、いつものように治癒することはありません。」

その時、もう一発の弾丸が彼女の胸を貫いた。

「さよなら。ルシフェル。わたくしの大切なあなた…。」

やがて、リーゼは黒髪からブロンドの長い髪に、身に纏っていた衣装は真っ白な美しいドレスとなり、その背には大きな羽が現れ、一瞬にしてその姿が薄れていき、代わりに金の薔薇となり、涙の様な雫を浮かべながら、金の霧と化して消えてしまった。忘れもしないその姿…。

「やったわ！これでジャンはあたしだけのものよ！」

耳触りの、喜びの狂気の声をあげるリリス。それと同時にリュシフェ、ルシフェルの体が真昼の太陽の様な、眩いばかりの黄金の光を放ち始める。その瞳は深い紫色に変わっている。

「やめろ！ルシフェル！真の罪を犯すな！」

突然、ルシフェルとは別の光がその場にあらわれた。ルシフェルの光を浴びて苦しんでいたジャンとリリスはその場で気を失った。

「離せ！よくも彼女を…！許さん！！」

「ばかもの！頭を冷やせ！彼等を殺しても、彼女は決して喜ばない！その事はお前が一番よく知っているだろう。」

腕をおさえられて、ルシフェルの光は少し小さくなり、やがて全くその光を放たなくなった。その瞳はただただ深い悲しみの涙で濡れていた。彼は小さくミカエルとつぶやくと、竹馬の友であるミカエルの肩に顔をうずめた。ミカエルは何も言わずただその肩を抱いていた。しばらくしてから、ミカエルがそっとルシフェルを自分から離すと、また会おうと別れを告げ去っていく。いつのまにかルシフェルの手にはミカエルの剣が握られていた。

—あなたは小道を彷徨い遠くへ去っていった

永遠に生き続ける歌を私に残して

「ラファエル。お前はリーゼが MARIA だと知っていたのか？」

「はい。彼女がリーゼ・カインツとしてこの世に生を受けたその時から。」

「ミカエルもなのか？」

「はい。おそらくご存知であったと思われます。だからこそ、呪われた金の薔薇は最期まで枯れなかったのでしょう。そして、こうなってしまう悲劇も…。何よりも MARIA 自身がわかっていたことでしょう。彼女は“預言”と“予言”の力を持っていた。」

「確かに、彼女は出会ったその時から私の事をわかっていたようだった。彼女の記憶がはっきりとする前に、私の事をリュシフェではなくルシフェルと呼んだ時があった。ならば初めて会った時に何故 MARIA だと言ってくれなかったのだろう。」

「—正確に申し上げますと、彼女はリーゼとしてこの世に生を受けた時は確かに“人間”のリーゼでした。もしお望みならお話いたしますが、ルシフェル様ご自身が傷つかれるかもしれません。」

「かまわない。教えてくれないか。」

「—御意。彼女、リーゼは、何不自由なく幸せな家庭に生まれてきました。どちらかという裕福な家で育ち、あのジャンのルッキーナ家とも親同士が親友であり、本当の兄と妹のように過ごしておりました。ところが、彼女が10才の時にカインツ夫妻がジャンに殺され、天涯孤独の身の上になり、その事を哀れに思ったルッキーナ夫妻に養女として引き取られ、ジャンとは血の繋がりが無い本当の義兄と義妹になりました。もちろん、ルッキーナ夫妻は心からリーゼを心配し、愛しく思っていたからこそ養女にしました。しかし、ジャンはそう思っていないで。彼を義兄と慕う彼女の気持ちを利用して、良い兄のふりをしていただけにすぎませんでした。MARIA と同じく、彼女は幼い頃より可憐で美しく、心優しい女性でした。そんな彼女をジャンはずっと狙っていたのです。そして、先に申しあげました通り、ジャンは15才の時にカインツ夫妻を殺め、続いて、自分の娘のように慈しみ育てていたルッキーナ夫妻を、実の父親を事故に見せかけて殺し、母親には少しずつ毒を盛り、じわじわと命を締めさせて殺しました。そうなるとう当然カインツ家の財産を含め、ルッキーナ家の財産も自分のものになります。そして…ジャンは彼女が16才の時に、彼女を犯し、力づくで彼女を自分のものにして、彼女の自由を奪いました。当然、彼女は心に深い傷を負って、何度も何度も自らの命を絶とうとしました。本来ならば、リーゼ・カインツは16才の時に、その短い生涯を閉じるはずでした。しかし、彼女の中には天界の人間、しかも大天使として生を受けた MARIA が眠っていました。人間のリーゼ・カインツが死についた時、リーゼの中の MARIA が目覚めました。だが、この地の世界でその姿をあらわすことはできませんから、MARIA はいざというときに目覚められるように、自分自身を封印したのでしょう。そう、私達を助ける時のために…。」

「—そうか。話してくれてありがとう。私はまた長い時を過ごすことになるのだろう。彼女と再び巡り合うまでの長い時を…。」

ルシフェルの心の中にリーゼの歌声とスターダストの詩が浮かんでくる。

—見る夢は儂いけれど心の中で生き続けるのは星屑のメロディー

繰り返す愛の調べ

「お父さん。お母さん。見て。あんな場所に美しい教会があるわ。」

「まあ。本当だわ。何という名前の教会かしら。あら。本に載っていないわ？」

「一行ってみようか…。」

妻は、はいと返事をするに厳しい顔をした夫の後に続いた。何か変だわと感じながら。一方、娘はその美しく古びた教会に瞳を輝かせながら歩いていく。

この親子連れは、娘の高校最後の夏休みに海外旅行に来たのだった。ヨーロッパに行こうと決めていたので、当初はイギリスかフランスなどを予定していたのだが、娘がルーマニアに行ってみたいと言い出したので、何故ルーマニアなのかと思いつつも渋々承知したのだった。

ウィッチクラフト（魔女文化）がまだこの現代にも息づいており、「魔女」「呪術師」「占い師」が職業として認められているこの国は、三輪家とも関わりがあるともいえるし、全く関わりがないともいえる。三輪家は、代々宮司を務める由緒正しい神社の家系で、現在の宮司である三輪和成はその何代目かだが、いつから続いているのか不明なほど古い歴史を持つ。

教会の扉を開けて中に入ると、年若い神父が祈りを捧げているところだった。人の気配を感じたのか、その神父は祈りを中断して教会の入り口の方を振り返った。真っ青な瞳と淡い金髪をもつ彼は、天使を彷彿させる容姿をしていた。三輪親子を見ると、ゆっくりと口を開いた。

「旅行ガイドにも載っていない、こんな古びた教会に来られる方は珍しい。何かご用でしょうか？」

「日本語が話せるのですか？」

「はい。私は幼い頃より現在まで、両親と日本に住んでおりました。両親が天に召されたので、故郷で告別式を行うため、つい最近この故郷に戻ったのですよ。そしてこの教会を継ぎました。」

「そうでしたか。あまりにも流暢な日本語なので驚きました。実は家族旅行でルーマニアに来たのですが、娘が偶然こちらの教会を見つけまして、あまりにも美しいので立ち寄ってみたのです。祈りの邪魔をしまい申し訳ありません。」

「いえ、かまいませんよ。せっかくなのですからお茶でも用意しましょう。ここは私の自宅も兼ねておりますので、こちらへどうぞ。」

外観ではあまり大きいように見えなかったこの教会だが、かなり奥行きがあり、見た目よりも広いことがわかった。懺悔室のほぼ向かい側にある少し広めの扉から祈りの間を出ると廊下になっていて、壁には数々の美しい絵画がかかっている。見事な絵ですね、作者はどなたですかと尋ねると、神父は丁寧に題材は教会にふさわしい宗教画が主なものですが作者はわかりませんと答えた。三輪和成がこれだけ広く美しく歴史がありそうな教会であればガイドブックに載っていてもよさそうなものだが…と感慨深く歩いていると、神父のどうぞという声で彼の私室についた事がわかった。アンティークなシャンデリアや机と椅子、素人目にもよくあるアンティークに見せかけた代物ではないという事がわかる。部屋の壁には、廊下にあった絵とは比べ物にならないくらい立派な絵が2枚かかっていた。1枚は6枚の羽根を広げるとても美しい天使像で、残りの1枚はその天使と寄り添うように立っている美しい女性が描かれていた。一見すると聖母と天使像のように見えるが、聖母と天使というよりは美しい恋人同士のような。天使の右腕は、愛しそうにその女性の肩を抱いており、もう一方の左手は金色の薔薇を持っていた。薔薇を持つというよりは、女性にその薔薇を捧げているようで、女性はその薔薇を両手で包み込むようにしている。聖母と天使なら白百合を持っていてもよさそうだが…だとしたら、受胎告知ともとれる絵だが、果たしてこの絵は何をあらわしているのだろうか、などと思いながらその絵を見つめている三輪和成に神父が声をかけた。

「どうぞ、そちらの椅子におかけください。」

「あ、これは失礼しました。とても美しい絵なのでつい見とれておりました。この絵は天使ガブリエルと聖母マリアの受胎告知ですか？花が白百合ではなく、薔薇とは珍しいですね。しかも金の薔薇とは…。作者はどなたなのでしょう。ダ・ヴィンチやラファエロに通ずるような、素晴らしい絵ですね。」

「多大な褒め言葉に恐縮いたしますが、それは私が手慰みに描いたものです。」

「あなたが？いや、失礼しました。神父さまが絵を描かれるとは思っていませんでしたので。」

「あなた。神父さまに失礼ですよ。申し訳ありません。」

「いいえ。気にしませんよ。ご主人がおっしゃっているように、殆どの神父は真面目な顔をして聖書を読んで、神についてとうとうとお説教を説くことが仕事ですからね。私が神父としては異端なのかもしれません。」

「失礼します。お茶をお持ちしました。」

「ありがとう。まあ、お座りください。」

3人が席につくと、うやうやしく頭を下げ、カップと小さな小皿をセットする。その小皿に後ろからついてきた女性が、見るからに手作りのケーキをいそいそとおいていく。

「美味しそう！いただきます。」

「こら、真理亜。行儀悪いでしょ。」

「かまいませんよ。彼等は私の世話をしてくれているフェリアス夫妻で、ジークとミレーヌです。私には妻がおりませんので、彼等が家族の様なものなんです。どうぞ、お召し上がりください。」

「では、遠慮なくご馳走になります。」

年若い神父はラファエルという名前で、年齢は若干23歳という若さであり、しかも人を安心させるような不思議な雰囲気を持っていた。日本の若者に比べると年齢の割にとっても落ち着いていて博学でもある。かといって頭が固いというわけではなく、ユーモアもありゲストを飽きさせない。何よりもその声がとても心地よくて、誰でも癒されるだろうと思われた。実際、三輪家も時間がたつのを忘れてしまうほど彼の話に引き込まれた。

ラファエルの話を聞いているうちに外は暗くなってしまい、宿泊しているホテルに帰れなくなった三輪家。どうしたものかと困っていると、ラファエルが自分の家にお泊り下さいと言ってくれた。但し、ゲストルームは1室しかないとしりなげにラファエルはいったが、家族なので問題ないと彼の言葉に甘えることにした。

その夜、三輪家の一人娘の真理亜は不思議な夢を見た。とても美しい薔薇園の中に佇む6枚羽の美しい天使。その天使はとても哀しげに下を向いていた。次の瞬間、フツと顔を上げると先程とは対照的に光り輝くような笑みを浮かべ両手を広げた。すると2枚羽の美しい女性が、胸の中に飛び込むように走り寄り、幸せそうな顔でその天使に抱かれている。暖かい広い胸と力強い心臓の鼓動が伝わってきて、まるで自分がその天使に抱かれているような感覚になった。やわらかい金髪や、息遣いまで聞こえてくる。完全に夢の中の女性＝自分となってしまったのか、夢の中で驚いてその天使から離れると再び哀しげにその手を自分の方に差しのべた。もう一度抱きしめようとするように。その天使の涙に胸が詰まり、真理亜の目からも自然と涙が流れた。

翌朝、お世話になったラファエル神父とフェリアス夫妻に丁寧に別れを告げた時、ラファエル神父はいつになるかわからないが、たぶん何年後かに私は日本に行くことになるでしょう、という予言めいたことを話し、三輪和成の右手をしっかりと握り、妻の琴音には貴婦人にするように右手にキスをして礼を取り、真理亜には頬に挨拶のキスをした。その瞬間、娘が固い顔をしたことを父親の和成は見逃さなかった。

「真理亜、初めての海外旅行がルーマニアで本当によかったのかい？」

「もちろんよ。だって私が行きたいっていったじゃない。連れてきてくれてありがとう。お父さんとお母さんには本当に感謝してるよ。」

「それなら、いいんだが…。」

「何？何か言いたそうだね。何かあるなら話して。」

和成は、一瞬迷ったようだが、決心したように娘に話し始めた。

「家が代々宮司をしている家系だという事は知っていると思うが、直系の血筋で、時々現代の科学でも判明できない事が現れる者がいる。自然の持つ波動と一体化できる者、その場に居ないものが見える力、いわゆる靈感に優れている者、諸々の罪や穢れを浄化できる者、そして日本では千里眼といわれている予知能力のある者。父さんにもそういう力が少しあって、あのガイドブックに載っていない教会に宿泊させてもらった夜に気になる夢を見てね。紫の目をした6枚羽の天使と女性の夢だ。その夢の中の女性が君だった。いや厳密に言えば、君によく似た女性が出てきた。その夢で」

「その夢、私も見たよ。女性の顔まではわからなかったけれど、6枚羽の美しい天使とその女性が幸せそうに抱き合っていた。女性にも美しい純白の羽が2枚あって…場所は薔薇園で綺麗な薔薇がたくさん咲いていたけれど、その薔薇よりも6枚羽の天使の瞳の方が美しかった。美しい紫の瞳。」

「同じ夢…。君も父さんと同様に、そういう力を持っているのかもしれないね。父さんが言いたかったのは、あの教会を出た後の真理亜の様子気になっているんだよ。ラファエルが君にお別れのキスをしたとき、何か気にかかることをいったのだろう？少し様子がおかしかった。何を言われた？」

「う…ん。私達に言った言葉と全く同じなんだけど…何年後かにきっと会います。あなたの紫の瞳の天使と一緒に…って。それと。」

「それと？話してごらん。」

「これは私が勝手に思ったことだけど、私はラファエル神父に会ったことがあるような気がする。神父さまだけでなく、フェリアス夫妻にも。あと…あと肖像画に描かれていた6枚羽の天使にも。多分、夢の中に出てきた天使と同じ天使だと思う。そして、肖像画の下に置かれていたケースの中に並んで入っていた、古い誰かの日記と剣も見たことがある気がして、とても気になるの。変よね？」

「一人間は“生まれ変わり”がある。もしかしたら、真理亜の前世はここ、ルーマニアだったのかもしれないな。さあ、飛行機の時間だ。行こうか。」

「ラファエル様！」

神父が静かに祈りを捧げている時、血相を変えてジークとミレーヌが飛び込んできた。

「どうした？何かあったのか？」

「申し訳ありません。目を離したすきにアレが黒い霧となって逃げ出しました！同時にあの方も。どこに向かったかは不明です。」

「それはまずいな。何事もおこらなければいいのだが…。悠長なことをいつてられないかもしれない。我々もすぐに出るぞ。アレとあの方を追わなければ。」

「何処に行ったかお分かりになるのですか？」

「もちろんだとも。行くぞ。」

「お父さん。境内の掃除終わりました。」

三輪真理亜は27才になった今でも、ふと18才の時に両親と共に旅行したトランシルヴァニアのことを思い出す時がある。楽しい思い出はもちろんだが、最後に何となく立ち寄った古くて美しい教会。そこに飾っていた宗教画のことが脳裏に焼き付いていて離れないのである。その絵は確かに美しいものだったが、名のある画家が描いたものではなく、神父さまが描いたという絵だった。紫の瞳の美しい6枚羽の天使、とても気になって旅行から帰った時に天使に関する資料を読んだ。6枚羽の天使は、天使の位階では最上位の熾天使と書かれていた。紫の瞳の美しい天使。その姿を今でも忘れられない。その絵を思い出すと胸が痛むのだった。何故だろう？この疑問が頭から離れない。

「ありがとう。お前は自分の仕事もあって疲れているだろう。それなのに私の仕事を手伝ってくれて、本当に助かるよ。」

「別に大丈夫よ。体力には自信があるから。」

「そうかもしれないが、私としては、すぐにでも結婚して」

「ストップ！それは悪いと思っているけれどわたしは今の仕事に誇りを持っているの。その事については何度も話し合ったでしょう？」

「そうだけどな。親としては心配なんだ。」

わかっていると一言いうと、無言で掃除用具の後片付けをしている愛娘を見つめながら、深いためいきをつくときらめたように小さく首を横にふりながら話しかける。

「そうだ。神社本庁から神職資格取得が発給された。よく頑張ったね。父さんの誇りだよ。」

「よかった！女性だと難しいと思っていたから。これはご先祖様のおかげね。感謝しなくてはね。」

「そうだな。うちには後継者がお前しかいないし、おそらく、確実に1000年以上は続いている由緒正しい神社だという事で、今回は特別にという条件付きだったよ。お前がいうように通常だと女性はかなり難しいからね。ほとんどが神職資格は取得できない。しかし、何度も確認したが、本当にお前はいいのかい？実際お前は仕事があるし、神職も兼ねるとしたらかなり大変だぞ。例大祭や日常の祈祷、年中行事やお祓いの受付等々。」

「大丈夫よ。私は特別な事がない限り基本休み、といっても待機だけどね。私が呼び出しになるような案件はそんなにないわよ。」

「だいたいいいんだが、近頃は物騒だからな。特にインターネットがこれだけ普及したらいろんな情報が嫌でも耳に入ってくる。環境汚染、自爆テロ、ネットによる金銭犯罪、性犯罪等々だ。全く人間はどうにかなってしまっただけではないかと思わずにはいられない。皆、生命の尊さや自然を畏怖し感謝する気持ちなど何処にもなくなってしまったのではないだろうか。悲しくて哀れな事だよ。まあ、神職の身である私の偏見も入っているかもしれないが。こんな事に憤りを感じてはいても、私もインターネットの恩恵を受けていることは間違いないからなあ。実際、インターネットがなかったらご祈祷の予約も受けられない始末だよ。もともと神道とは自然や自然現象、祖霊たる神や怨念を残して亡くなった者などを敬い、それらを八百万の神に見出すものであり、自然と神は一体的に認識されるといった宗教だからね。一方、インターネットは人工的に作られた文化であり、今現在では主流となっている。オーバーな話かもしれないが、現在の神話とでもいうべきものなのかもしれないな。」

「そうね。現在ではサイバー犯罪がますます増加しているわ。警察の捜査もサイバー犯罪特別捜査班が必要不可欠な存在になりつつあるもの。」

その時、母のご飯ですよという声が聞こえた。まあ、私の目が黒い内はお前には大変な思いをさせないさと三輪和成は愛娘の肩をポンポンとそっと叩いた。

三輪家の朝は早い。5時に起床し、身支度を整え神殿の扉を開け神様にご挨拶、神社の門を開け、本殿境内の掃除、朝拝でお祓いを受けてから朝食となる。三輪家の神職者は10名、家のお手伝いさんや修行する若き神職見習いを含めると、20名にはなろうかという結構な所帯となる。かといって生活が苦しいという事はなく、神職になりたいと願う者は拒まないで修業をさせている。しかし殆どの者は、いま流行りのスピリチュアルや神社のパワースポットなどのテレビの影響を受けた希望者であるため、すぐに挫折しやめていく。その事をわかっていながら、あえて拒否はせず、本人の意思にまかせている。何故ならば、神職の修行をすることによって、本当の神道とは何かという事を体験して、その奥深さを実感として感じてほしいからという小さな願いからである。無論、修業を経て、神職取得を発給された者もいる。ここの神社で奉職したいという者はそのまま神職として受け入れるが、別の神社に奉職したいという者には推薦状を書いて力になっている。そんな和成のことを父親と慕う神職者も多い。妻の琴音は、父は会社員で母は専業主婦というごく一般的な家庭に生まれた。もちろん神道のことなどは全くわからないし、あまり興味があるわけではなかった。そんな二人が出会ったのが、琴音が25才で和成が28才の時だった。たまたま仕事の休暇で友人達と旅行をしていて、和成の神社にも立ち寄った時に出会ったのである。その頃はまだ修行中の身でありながら、跡取りという事で禰宜の位にいた和成が、たまたま神社の由来や祀られている神様の話、神楽の説明をしていた。よく通り説得力のある低い声、凜とした佇まい、そして神社という全く未知の世界のせいからか、和成の醸し出している神秘的な雰囲気…。神社から出て食事の席で友人達は、先程のイケメン宮司の話で盛り上がっていた。宮司ではなく禰宜だと否定すると友人達は、どうでもいいじゃん、とにかくかっこよかったねと締めくくった。それから琴音は神道の事をもっと知りたいと思い色々な資料を読み漁った。琴音は和成に一目惚れをしたのだ。その日から休暇の度に和成の神社を訪れていた。一方の和成は、神社の参拝に訪れた女性4人の旅行者の中で、熱心に自分の話を聞いていた1人の女性が気になっていた。彼女は誰だろう。何という名前なのだろうか？名前を聞けばよかったとずっと思い続けていた。自社の氏子ならばすぐに名前を知ることができるが、相手は旅行者で、無論、お祓いなどの予約もない。和成もまた琴音に一目惚れをしたのだ。そんな時に琴音がまた参拝に来たのである。和成は、その時ほど神の縁というものを強く感じ、神に感謝をしたことはなかった。再び会えたその事を二人はまさに赤い糸で結ばれていた、神の縁だと深く感謝したという。子供は真理亜一人しか恵まれなかったが、とても幸せな家庭を築いている。

「はい、三輪です。わかりました。すぐに現場に向かいます。」

「また事件か？」

「ええ。すぐに出かけます。ごちそうさまでした。」

真理亜は自分の部屋に戻るとパンツスーツに着替え、あわただしく家を出て行った。それを心配そうに和成と琴音は見送った。三輪真理亜は警視庁捜査一課の主任である。特に近頃は、テレビドラマなどの影響もあるのか、真理亜が待機している時に呼び出しをされることが少なからず増えてきた。

現場に着くと野次馬や警察官でごった返しになっており、手袋をはめながら何人もの人々をかき分け、先に到着していた部下に声をかける。

「被害者は？」

「三輪主任。お疲れ様です。被害者はこちらに。」

数人の鑑識が、青いビニールで覆われている被害者の周りを囲むようにして立っている。何故か鑑識全員が眉間にしわを寄せている。真理亜が近づいてきた事に気がつくとお疲れ様ですと声をかけた。

「被害者の身元は？」

「はい。被害者は20代の女性。死後硬直状況から見て、死亡推定時刻は昨夜の23時～24時。死因は…。」

死因はといったところで声がつまり、戸惑った様子を見せた鑑識。

「どうかしましたか？何か不審な点でも？」

「死因は大量失血によるものですが、何故そうなのか原因不明のため、法医学者による司法解剖が必要と思われれます。」

「原因不明？確認します。」

目の前の青いビニールシートに手を合わせた後、そのビニールをそっと外すと、真理亜も眉間にしわを寄せる。その被害者女性は顔色は異常な位に真っ白だが、抵抗はしなかったのか、苦渋の表情は全くない。まるで眠っているようで、今にも起き上がるかのように見える。手首を持ち脈拍を確認しても、脈拍はないし、体の冷たさが死を物語っている。服装の乱れもなく暴行された形跡もない。ただ首筋に2つの穴が空いているだけだ。真理亜がその首筋の穴を見てふとある事件を思い出した時に、1人の部下が先に声をかけた。

「三輪主任。この状況を見て私はある事件を思い出しました。」

「あなたが言うある事件とは、3年前の事件ですか？私もちょうど同じことを考えていました。」

この2人の会話に一部の鑑識も反応をみせた。

「一御遺体を運びましょう。お願いします。」

真理亜が事件現場にいるとき、三輪家に1人の訪問者があらわれた。近所の丘の上にある洋館に新しく引っ越してきたという若い男性だ。その人はリュシフェ・アストロフと名乗った。アストロフといえば、その莫大な財力で世界各国に貢献をし、世界的にも有名な資産家であり、おそらくその名を知らない者はいないというVIPである。とても美しい顔立ちで、高貴な雰囲気醸し出し、何処か影があり、神秘的な空気を漂わせていた。その並はずれた美貌に、三輪和成はふと寒気を感じた。それを敏感に感じ取ったのか、小さくふっと微笑むと夕食に誘う琴音に丁寧な断りの返事をして丘の上の自宅へと帰っていった。

「おはようございます。」

この日もいつもと変わらない朝だった。三輪真理亜は、朝の奉職を終え、朝食をとって仕事場へと向かった。この頃の真理亜は、実家の神社の後を継ぎ、警察の仕事と神職としての奉職も兼ねようと土日祝日は、宮司である父親について修業をしていた。待機日の呼び出しはあまりないが、公務員としての仕事と奉職というかなりハードな日々のため、何度か挫折そうにもなった。しかし、何とか踏みとどまり、着々と神職試験の準備は進んでいた。

「三輪巡查。警視庁捜査本部刑事課の本部長がお呼びだ。すぐに警視庁本部へ行くように。」

まだ所轄の生活安全課で庶務の担当をしていた真理亜は、突然の課長命令に驚きを隠せずにいた。特に出世をしようとか全く考えていなかった彼女にとっては不審そのものだった。一体なんだろうとドキドキしながら警視庁本部の建物の中に入っていく。重厚な扉の前につくと1度大きく深呼吸をしてから本部長室に入った。

「お父さん!？」

部屋に入った時、あまりの驚きのため真理亜は腰を抜かしそうになった。そこにいたのは本部長はもちろんだが、その他に三輪和成の姿があった。ばかみたいに口をあぐりとあけている娘にむかって父親がこらと小さく叱る。ハッと気がつく和本部長に自分の非を詫げる。

「まあそんなに畏まらなくていい。君は覚えてはいないかもしれないが、私はよく君のお父上に面会をしていた。君はとても幼く、よく私のことを久瀬宮のおじさんといっっては歓迎してくれた。」

久瀬宮部長といって、三輪和成が何かを合図するように目配せをする。久瀬宮はゴホンと大きな咳ばらいをした。

「三輪巡查。まあ椅子に掛けたまえ。君に見てもらいたいものがある。」

彼女が席に着くと、久瀬宮は少々とまどいながら、チラと和成を見る。そんな彼に和成は小さく頷く。

「これは…。」

真理亜はとまどいながら、久瀬宮の顔をうかがうように見た。久瀬宮は心配ないというように首を縦にふる。もう一度それを見ると彼女は重たい口調で話し始める。

「この女性は亡くなっています。被害者は10代の女性。原因不明の失血死。暴行された形跡はなし。」

この言葉を聞くと、久瀬宮は驚きのあまり真理亜のことを凝視した。その様子を素早く感じ取った真理亜はばつの悪そうな顔をした。

「君は何故、原因不明の失血死とわかる?確かにこの女性は10代で殺された被害者だ。但し、その死因が原因不明であるが故あまりに不可解な事件なので公にしていない案件だ。君にみせた写真も、被害者が生前の、おそらくはこんな悲劇に巻き込まれることなど予想もしないで笑っている時の写真だ。」

それはと口をつぐむ真理亜に和成が声をかける。

「隠すことはない。久瀬宮は私のこともよく知っている。」

「それはお父さんの能力の事?」

和成は深く頷くとゆっくりと答える。

「何せお前が生まれる以前からの幼馴染で親友だ。当然お前のことも知っている。さっき彼が話したことも本当だ。お前は忘れていたかもしれないが…。」

「君はとても人懐っこい可愛い子だったよ。その当時の私は出世の事ばかり考えていて、かなりとがっていたから様々な人物から敬遠されていた。おそらく顔も鬼のような形相だったと思うが、そんな私に物怖

じすることなく笑顔で接してくれていたのが和成だった。竹馬の友がこんなにも心を支えてくれるものとは思わなかった。」

しばらくの間、思いを馳せるように和成と久瀬宮は見つめ合うと穏やかに微笑んでいた。その様子を見るだけで、2人の間にある強い絆を感じ取ることができるようだ。それにしても、わたしは何故呼ばれたのだろうか。当たり前だが、父親と部長が幼馴染だという事をわざわざ教えるために呼ばれたわけではないだろう。そう思った時、久瀬宮は刑事の顔に戻り真理亜に話し始めた。

「さて、本題に戻ろう。三輪真理亜巡查。君のその素晴らしい能力を私に預けてくれないだろうか。」

一呼吸置くと、久瀬宮が辞令を告げる。

「三輪真理亜巡查。本日付けを持って、所轄の生活安全課より警視庁捜査本部捜査第一課への異動を命じる。階級を巡查から主任とする。」

真理亜にとっては青天の霹靂のような辞令だが、立ち上がると背筋を伸ばし、敬礼をして答える。

「はい。まだまだ未熟な自分ではありますが、精一杯ご期待に沿えるよう精進致します。」

「頼んだよ。この異動は前例のないことだが警視総監にも承諾してもらっている。」

「け…警視総監!？」

「これは極秘事項で一部の者しか知らない。実は、私は警視庁捜査本部長の他、公安の特殊任務も兼用しており、君に所属してもらおう捜査第一課とは、公安が母体の特殊捜査専門となる。警視庁捜査本部と異なる点は、常時家に待機という状態で、私が直接捜査指示をおこなっている。」

「お待ちください。そんな大切な捜査に携わるのが私などでよろしいのでしょうか？」

「君だからこそだ。君のその能力を遺憾無く発揮してもらいたい。」

「わたしの能力…。」

「先程、一枚の写真を見せただろう？私が扱っている事件は、先程の様な原因不明で公にはできないような不可解な案件のみなのだ。そんな案件はあまりないだろうと思っていたのだが、結構な件数があり、恥ずかしいことに私がしょっちゅう三輪の所に行っていたわけの一つが、現実には解決できそうにない事件の協力を仰いでいたからだ。」

おそらく、思い切り眉間にしわを寄せながら話を聞いていた真理亜に向かって、まあ椅子にかけなさいと促すと、和成がソファに腰かけ、向かいの椅子に久瀬宮が腰かけた。それを見てから真理亜も父親の隣に腰を下ろした。その様子を見てから久瀬宮はその女性の事件について話し始めた。

「この事件が起こったのは、今から半年前の昨年10月の事だった。」

写真の女性の遺体が見つかったのは昨年10月25日昼間の事だった。死因は原因不明の失血死。死後硬直の状態から、殺されたのは10月24日の23時から24時、ある公園の薔薇園の中で眠るように静かに横たわっていた。何処にも外傷はなく美しい顔をしていた。心筋梗塞というにはあまりにも苦悩の跡がなく、服毒自殺だとしても遺書など何処にも見当たらなかった。鑑識も遺体を確認したが、女性の首筋に獣が噛んだような穴がふたつ空いているだけだったという。

「この時、あまりにもおかしいという事で法医にご遺体を送ったのだが、その夜に女性の遺体が忽然と消えてしまった。ただ…。」

「ただ…?どうしたのですか？」

「その女性の解剖をした法医が、首の骨を折られて死んでいた。助手は首を刃物で切られて死んでいた。しかもその助手の血液は1/2以上も失血していたんだが、助手が倒れていた箇所に血液の跡が全くない不審死だった。もちろん、ルミノール反応もALSでも調べたが、何も反応が出なかった。つまり特殊捜査とは、化学が発展しているこの現代をもってしても解明できないもの、それは、いわゆる超常現象をも含まれる。その捜査をおこなう特殊な部署だ。」

大量失血なのに血液の跡がない？化学が発展した21世紀の現在をもっても解決できない事件？超常現象？そんなまさか！と言葉を詰まらせ何も答えられずにいる真理亜。

「まさか、と知っているだろう。確かに私も初めはそうだった。だが最近分かった事だが、私の祖先は陰陽師を取り仕切っている陰陽寮の官僚を務めていた家系で、家系図と共に、その当時の出来事など調べてみた。その中には秘文のようなものもあって、それらを読み終わった時に私の身に変化が起こった。」

そういうと久瀬宮は自分の身に起こった信じがたい変化について語り始めた。

ある休日の午後、彼は夢を見ていた。それはとても美しい薔薇園のある公園で、その薔薇園で、若い男女がとても幸せそうな笑顔で薔薇を見つめていた。だが突然、何の理由も根拠もなく、急に脂汗が出るほどの恐怖と寒気を感じ、彼の周りを黒い煙が取り巻き、首筋に熱いほどの痛みを感じた。驚いて飛び起きると、そこは彼の家の居間で、太陽の暖かな日差しを体いっぱいを受けていた。恐る恐る鏡を見て首筋を確認したのだが、傷痕などは何もなかった。

「夢かと思ったその瞬間に先程見せた10代女性の事件が発生し呼び出された。」

ただの偶然なのでは？と言おうと口をあげたとき、真理亜の言葉を遮るように久瀬宮が口をはさんだ。

「もちろん、私も偶然だろうと思っていた。が、実は同じ公園内の薔薇園で20代の若い男性の遺体も見つかった。あまりにも非現実的でありえないと強く否定もした。だが現場に到着して、被害者の年令、顔、そして死に方まであまりにも私の見た夢と同じだった。その時以来、不可解な夢を何度も見るようになり、何度も正夢となった。正夢というよりは予言のようだった。その力は増すばかりで、自分が能力者であると認めざるを得なかった。」

しばらくの沈黙の後、薔薇園の殺人事件に話を戻した。

「さて、薔薇園で死体を発見した後、半信半疑のまま2人の解剖を法医に依頼した。回答は私達と同じで、ありえない事件というものだった。失血の原因は、首筋にあった獣の牙がつけたような2つの大きな穴以外は考えられない…と。そして夜中の1:00に2人の遺体が消えた。」

「遺体が消えた？まさか…。監視カメラに遺体が運ばれた時の映像等、撮影されていなかったのですか？」

久瀬宮がゆっくりと頷いた。

「その映像をしてみるか？屈強な男でも思わず目をそらしてしまうほど、かなり残虐なものだが…。」

一瞬、真理亜は緊張のあまりごくりと唾を飲み込み躊躇してしまった。しかし、隣の和成がぜひ自分にも見せてほしいといったのを聞き、手に汗をかきながらも真理亜も同意する。ではこちらへと久瀬宮が隣室の彼専用の視聴覚室に案内する。

その映像は、10月25日25:00の記録だった。そこには、かなり年配の白衣を着た男性1人と彼とは一回り程違うであろう男性の2人が研究室の様な場所で書類を作成している様子が映されていた。恐らく、10代の女性を解剖した法医とその助手だろう。何の変哲もない映像のようだが、次の瞬間、恐怖におびえた法医と助手の顔が映され、法医の凄まじい断末魔とボキッという首の骨が折れる音と助手の血まみれになった首、そしてほぼ360度回転して白目をむいた法医の遺体と、首の半分が斬られ落ちそうになっている助手の蒼ざめた恐怖に満ちた表情をした遺体が床に転がっている映像だった。そこでプツリと映像が暗くなって終わっていた。思わず目をそらす真理亜だが、和成は冷静にその様子を見つめており、久瀬宮にもう少し画像を戻してくれないかと頼んでいた。久瀬宮が真理亜を気遣って躊躇しているのを見ると、お前はもう隣室へ戻りなさいと真理亜に指示する。それを受けて、もともと負けん気の強い真理亜は、自分も残ると答えた。無理をするなという久瀬宮の言葉にも大丈夫ですと答える。では…と映像を2人が殺された画面に戻した。それを見終わった後3人で隣室に戻った。重苦しい雰囲気の中で、最初に声を出したのは和成だった。

「一君のいう通り、あれは人外のなせる仕業としか思えないな。」

「うむ。それはいったい何者の仕業なのか。あるいは何かの呪詛なのか。」

「犯人は何故姿が見えなかったのでしょうか。何かトリックがあるのではないのでしょうか？それもかなり大がかりなトリックが。」

「私も君と同じことを考えて、色々あの研究室を詳しく調べたが、見事なぐらい何も出てこなかった。だから、和成の力を借りたいと思ってここに来てもらった。これは刑事としての私の勤ではなく、陰陽師としての勤なのだが、私と和成2人をもってしても解明できない何かはたらいている現象ではないかと思うのだ。そして、この恐怖は必ず日本中を巻き込んでいく。いや、もしかしたら世界中を巻き込む恐怖かもしれない。」

何の根拠もないが、真理亜も和成と久瀬宮と同様にゾツとするような寒気と恐怖で胸がざわつくのは確かだった。真理亜は、突然ルーマニアで見た美しい天使像と、教会のケースに飾ってあった剣を携えている大天使の画像が脳裏に浮かんできた。

「ルシフェル、ミカエル…。」

「ルシフェル？ミカエル？何を言っているんだ真理亜。地上に堕ちた熾天使と大天使ミカエルの事か？」

「ごめんなさい。声に出したつもりはないのだけ…！」

彼女が急にもう一度、画像を見せてくれと大きな声を上げた。久瀬宮は驚きながらも、パソコンでも見れるからと、パソコンを開いた。悲惨な現場が映し出され、その映像を静止するとじっと食い入るように見つめる真理亜の横から和成と久瀬宮が覗き込む。

そこには、先程見た映像と異なったものが映されていた。黒い霧にかたどられていたもの、はっきりとは映し出されていないが、あきらかに人の形の様な固まりが大小2つ。パソコンを通してその禍々しさを感じられる。和成と久瀬宮は、いいようのない恐怖と寒気にゾクツと身を震わせた。

「呪われし者が復活してしまった…。」

真理亜がそっと呟いた。